

情報プラットフォームサービス

文書バージョン: 4.1 Support Package 9 – 2017-01-31

## 情報プラットフォームサービスインストールガイド (Windows)

# 目次

<b>1</b>	<b>ドキュメント履歴.....</b>	<b>4</b>
<b>2</b>	<b>はじめに.....</b>	<b>5</b>
2.1	このドキュメントについて.....	5
2.2	目的.....	5
2.3	制約.....	5
2.4	変数.....	5
<b>3</b>	<b>計画.....</b>	<b>7</b>
3.1	新しい機能とコンポーネント.....	7
3.2	データベースサーバ.....	9
3.3	言語.....	9
<b>4</b>	<b>事前準備.....</b>	<b>11</b>
4.1	システム要件.....	12
	アカウントの権限.....	12
	ネットワークの権限.....	13
4.2	CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備.....	14
	IBM DB2 の追加要件.....	15
	Sybase ASE の追加要件.....	16
4.3	SAP サポート.....	16
	SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート.....	16
	SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート.....	18
	CA Wily Introscope のサポート.....	18
4.4	最終チェックリスト.....	18
<b>5</b>	<b>インストール.....</b>	<b>20</b>
5.1	対話型のインストールを実行する.....	20
	インストールの種類を選択する.....	21
	インストールプログラムの実行時.....	34
	インストール完了時.....	34
5.2	サイレントインストールを実行する.....	35
	コマンドラインスイッチパラメータ.....	35
	インストールオプションのパラメータ.....	37
5.3	段階的インストールを実行する.....	44
	新しいインストールの段階的インストールを実行する.....	44

	アップデートインストールの段階的インストールを実行する. . . . .	46
<b>6</b>	<b>インストール後の作業. . . . .</b>	<b>48</b>
6.1	インストールの確認. . . . .	48
	ログインのトラブルシューティング. . . . .	48
6.2	SAP サポート. . . . .	49
	インストール後のシステムランドスケープディレクトリ (SLD) データサプライヤ (DS) の設定. . . . .	49
	インストール後に SMD エージェントを設定する. . . . .	50
	インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する. . . . .	50
6.3	サードパーティ ERP の統合. . . . .	51
	Siebel Enterprise 統合を有効化する. . . . .	51
	JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化する. . . . .	51
	Oracle E-Business Suite (EBS) 統合を有効化する. . . . .	52
6.4	インストール後の診断チェック. . . . .	53
6.5	情報プラットフォームサービスの変更. . . . .	53
	情報プラットフォームサービスを変更する. . . . .	53
	情報プラットフォームサービスを修復する. . . . .	54
	情報プラットフォームサービスを削除する. . . . .	54
	情報プラットフォームサービスにバンドルされているサードパーティソリューションへのパッチの適用. . . . .	55

# 1 ドキュメント履歴

以下の表は、重要なドキュメント変更の概要です。

バージョン	日付	説明
情報プラットフォームサービス 4.1	2013 年 5 月	このドキュメントの初版です。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 1	2013 年 8 月	変更はありません。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 2	2013 年 11 月	変更はありません。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 4	2014 年 5 月	SIA 名にアンダースコア ("_") は使用できません。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 7	2015 年 11 月	<a href="#">[新しい機能とコンポーネント]</a> の AutoConfigure ツールに関する情報が更新 されました。  <a href="#">[新しい機能とコンポーネント]</a> および <a href="#">[対話 型のインストールを実行する]</a> の注が更新さ れました。  <a href="#">[新しい機能とコンポーネント]</a> の役立っリソ ースおよびマニュアルのドキュメントに関す る情報が更新されました。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 8	2016 年 6 月	<a href="#">新しい機能とコンポーネント [7 ページ]</a> の SQL Anywhere に関する情報が更新さ れました。  <a href="#">新しい機能とコンポーネント [7 ページ]</a> および <a href="#">言語 [9 ページ]</a> の新しい言語サ ポートに関する情報が更新されました。  <a href="#">段階的インストールを実行する [44 ペー ジ]</a> 、 <a href="#">新しいインストールの段階的インストー ルを実行する [44 ページ]</a> 、および <a href="#">アップ デートインストールの段階的インストールを 実行する [46 ページ]</a> に段階的インストー ルの情報が追加されました。
情報プラットフォームサービス 4.1 サポート パッケージ 9	2016 年 11 月	Tomcat アプリケーションサーバのすべての 参照が Tomcat 7 から Tomcat 8 に更新さ れました。

## 2 はじめに

このマニュアルでは、情報プラットフォームサービスのインストール手順について説明します。

### 2.1 このドキュメントについて

以下のマニュアルでは、管理者を対象に、情報プラットフォームサービスサーバのインストール、削除、変更についての情報、手順、およびオプションについて説明します。このガイドには次の 2 種類があります。

- 情報プラットフォームサービスインストールガイド (Windows 版): Microsoft Windows オペレーティングシステムを使用している場合に参照します (このドキュメント)。
- 情報プラットフォームサービスインストールガイド (UNIX 版): Unix または Linux オペレーティングシステムを使用している場合に参照します。

### 2.2 目的

本書は、情報プラットフォームサービスのフルインストールを実行するシステム管理者を対象としています。

### 2.3 制約

このガイドでは、サポートされているホストオペレーティングシステムのセットアップ方法、データベース、Web アプリケーション、または Web サーバについて説明していません。専用のデータベース、Web アプリケーション、または Web サーバを使用する場合、情報プラットフォームサービスをインストールする前にこれをインストールして機能させておく必要があります。

### 2.4 変数

以下の変数は、このマニュアル全体を通して使用しています。

変数	説明
<IPS_INSTALL_DIR>	BI プラットフォームのインストールディレクトリ。

変数	説明
	Windows の場合、デフォルトのディレクトリは C:¥Program Files (x86)¥SAP BusinessObjects¥ です。
<WAS_HOSTNAME>	BI プラットフォーム Web アプリケーションがデプロイされる Web アプリケーションサーバのホスト名または IP。

## 3 計画

情報プラットフォームサービスは、Windows、Unix、または Linux のプラットフォームにインストールできます。

インストール前:

- 情報プラットフォームサービスをインストールするオペレーティングシステム、アプリケーションサーバ、データベースサーバ、およびその他のコンポーネントがサポートされていることを確認してください。Product Availability Matrix (PAM) を参照してください (<https://support.sap.com/release-upgrade-maintenance/pam.html>)。
- 組み込まれた Sybase SQL Anywhere データベースサーバを CMS および監査データベースに使用するかを決定します。

情報プラットフォームサービスと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムでインストールおよび設定することができます。お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポートされるデータベースを決定することをお勧めします。

### i 注記

インストールプログラムに組み込まれたデフォルトデータベースを使用しない場合は、インストールを開始する前に、使用予定のデータベースを設定しておいてください。データベースには、適切なデータベース権限が設定されたユーザアカウントが必要で、適切なドライバがインストールされ、動作することが確認されている必要があります。インストールプログラムはデータベースに接続し、データベースを初期化します。

インストールプログラムによって、ローカルマシンだけにデータベースがインストールされます。ネットワークを通してインストールすることはできません。

- 組み込まれた Tomcat Web アプリケーションサーバを使用するかを決定します。  
情報プラットフォームサービス Web アプリケーションをホストする Web アプリケーションサーバシステムがない場合、インストールプログラムによってインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポートされるデータベースを決定することをお勧めします。その他のサポートされる Web アプリケーションサーバを使用する場合、情報プラットフォームサービスをインストールする前にインストールおよび設定を行い、アクセス可能にしておく必要があります。  
インストールプログラムによって、ローカルマシンだけに Tomcat がインストールされます。ネットワークを通してインストールすることはできません。

### 3.1 新しい機能とコンポーネント

情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 インストールプログラムの新機能およびコンポーネントを以下に示します。


## Sybase SQL Anywhere バンドルデータベースがバージョン 16 に更新される

既存のシステムを SAP BusinessObjects 情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 に更新すると、CMS および監査データストアにバンドルされている Sybase SQL Anywhere はバージョン 16 に更新されます。

アップデートインストールプログラムを使用して、バンドルされた Microsoft SQL Server Express データベースサーバを使用する 4.0 インストールを 4.1 サポートパッケージ 8 に更新する場合、追加のアクションを行わずに、既存のバンドルされたデータベースサーバを継続して使用することができます。

または、既存のデータベースを SAP SQL Anywhere に移行するには、「Sybase SQL Anywhere への移行」に記載されている手順に従います。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence Suite 4.1 サポートパッケージアップデートガイド』を参照してください。

## SAP AutoConfigure ツールが Tools フォルダにパッケージ化されている


SAP AutoConfigure ツールは、SAP BusinessObjects 情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 の  **Collaterals** > **Tools** フォルダにパッケージ化されています。

## 情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 インストーラのインストールウィザード画面の改良点

情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 インストーラのインストールウィザード画面に製品出荷マトリックス (PAM) のハイパーリンクが示されます。

インストールウィザード画面が改良され、以下のメッセージが表示されるようになりました。サポートされるプラットフォームの詳細については、<https://support.sap.com/pam> を参照してください。

## 役立つリソースおよびマニュアルのドキュメントが Useful Links フォルダにパッケージ化されている

役立つリソースおよびマニュアルのドキュメントは、Intelligence 情報プラットフォームサービス 4.1 サポートパッケージ 8 の  **Collaterals** > **Useful Links** フォルダにパッケージ化されています。

ドキュメントには、以下のリンクおよび情報が含まれています。

1. 製品マニュアル
2. 製品出荷マトリックス
3. BI e ラーニングチュートリアル
4. SAP BusinessObjects パターンブック
5. Adaptive Processing Server ベストプラクティス
6. Business Intelligence サイズ設定ガイド



## 7. Business Intelligence アップグレードリソース

### 言語サポート

情報プラットフォームサービスインストールを修正して、言語を追加または削除できるようになりました。

情報プラットフォームサービスをベースバージョン (4.1 SPX) から上位バージョン (4.1 SP8) に更新する場合、上位バージョンのアップデートに新しい言語が追加され、ベースバージョンに新しい言語は表示されません。

#### 例

情報プラットフォームサービスをベースバージョン 4.1 SP6 から上位バージョン 4.1 SP8 に更新する場合、上位バージョンのアップデートに新しい言語が追加されます。新しい言語 (アラビア語など) が 4.1 SP8 に表示されるようにするには、ベースバージョン 4.1 SP6 を修正して新しい言語を追加します。

言語を追加または削除するには、**スタート ▶ コントロール パネル ▶ プログラムと機能** を表示して、BI プラットフォームサーバーまたはクライアントツール製品を選択し、**[アンインストールと変更]** をクリックします。**[変更]** オプションを選択し、**[言語パックの選択]** 画面で言語を追加または削除します。

## 3.2 データベースサーバ

情報プラットフォームサービスと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムでインストールおよび設定することができます。お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポートされるデータベースを決定することをお勧めします。

Sybase SQL Anywhere はデフォルトのデータベースサーバです。インストールプログラムの実行時には、他のすべてのデータベースサーバが実行されており、アクセス可能である必要があります。

#### 注記

データベースクライアントおよびサーバでは、Unicode 文字セットが使用できる必要があります。

サポート対象のデータベースバージョン、改訂レベル、および要件の一覧については、SAP BusinessObjects BI 4.1 製品出荷マトリックス (PAM) (<http://service.sap.com/pam>) を参照してください。

## 3.3 言語

情報プラットフォームサービスのユーザインターフェースは、40 を超える言語に翻訳されています。フルインストールまたは修正インストール時に、言語パックをインストールして、異なる言語のサポートを追加できます。言語パックのインストールサイズが大きくなる可能性があるため、必要な言語パックのみインストールすることをお勧めします。

情報プラットフォームサービスインストールを修正して、言語を追加または削除できるようになりました。

情報プラットフォームサービスをベースバージョン (4.1 SPX) から上位バージョン (4.1 SP8) に更新する場合、上位バージョンのアップデートに新しい言語が追加され、ベースバージョンに新しい言語は表示されません。

#### 例

情報プラットフォームサービスをベースバージョン 4.1 SP6 から上位バージョン 4.1 SP8 に更新する場合、上位バージョンのアップデートに新しい言語が追加されます。新しい言語 (アラビア語など) が 4.1 SP8 に表示されるようにするには、ベースバージョン 4.1 SP6 を修正して新しい言語を追加します。

新しい言語を追加するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. **スタート** > **コントロール パネル** > **プログラムと機能** の順に選択します。
2. 情報プラットフォームサービスのベースバージョンを選択します。
3. **[変更]**、**[次へ]** の順に選択します。
4. **言語パッケージの選択**ダイアログで言語を選択し、**[次へ]**を選択します。
5. **機能の選択**ダイアログで機能を選択し、**[次へ]**を選択します。
6. **拡張インストール**ダイアログで、**[次へ]**を選択します。
7. **既存の CMS デプロイメント情報**ダイアログで CMS 管理者ログオンパスワードを入力し、**[次へ]**を選択します。
8. **インストールの開始**ダイアログで **[次へ]**を選択してインストールを開始します。
9. インストールを完了するには、**[次へ]**を選択します。

情報プラットフォームサービスでベースバージョンに新しい言語が追加されます。

## 4 事前準備

この節は、情報プラットフォームサービスをインストールするための準備について詳細を示します。

### プロセスフロー

- 十分な利用可能ディスク容量を確保してください。後でパッチや新しいコンポーネントを使用できるように、オペレーティングシステムおよびソフトウェアの両方で利用できるようにします。
- インストールメディアを準備するか、<https://support.sap.com/home.html> のサポートポータルから、最新リリース、およびパッチやサービスパックをダウンロードします。さらに、以下をダウンロードします。
  - SAP HOST AGENT - SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用するのに必要なソフトウェアパッケージです。詳細については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#)を参照してください。  
SAP HOST AGENT をダウンロードするには、<http://support.sap.com/home.html> > [ダウンロード](#) > [Support Packages and Patches](#) > [Browse our Download Catalog](#) > [SAP Technology Components](#) > [SAP HOST AGENT](#) を参照してください。
  - SAPCAR - SAP サービスマーケットプレイスからダウンロードした .SAR 形式のパッケージの圧縮、圧縮解除に使用する圧縮ユーティリティです。  
SAPCAR をダウンロードするには、<http://support.sap.com/home.html> > [ダウンロード](#) > [Support Packages and Patches](#) > [Browse our Download Catalog](#) > [SAP Technology Components](#) > [SAPCAR](#) を参照してください。
- SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合、情報プラットフォームサービスをインストール前に SAP Host Agent がインストールされていることを確認してください。SLD の詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「システムランドスケープでの情報プラットフォームサービスの登録」に関する項目を参照してください。SAP Host Agent については [SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#)を参照してください。
- インストールプロセスで設定するオプションの値を決定します。ほとんどの場合、デフォルト値を使用します。高度なインストールでは、インストールプロセスを計画する必要があります。以下の情報の入力を求めるプロンプトが、インストールプログラムから表示されます。
  - 製品キー
  - 情報プラットフォームサービスがインストールされるフォルダ
  - タイプ、接続、および認証詳細を含む、Web アプリケーションサーバ構成
  - タイプ、接続、および認証詳細を含む、データベースサーバ構成
  - Central Management Server (CMS) 管理者アカウントパスワードとクラスターキー
  - 受信接続を受け取る CMS ポート番号
  - Server Intelligence Agent (SIA) 名
  - 受信接続のための Server Intelligence Agent (SIA) ポート番号
  - タイプ、接続、および認証詳細を含む、CMS システムおよび監査データストアの設定情報
  - SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) の構成

- Introscope Enterprise Manager の統合構成
- 構成ファイルを保存するための Subversion または ClearCase バージョン管理システムの構成
- プロモーションマネジメント設定
- インストールタイプ (フル、カスタム/拡張、Web Tier)。別のインストールタイプの説明については、「[インストールの種類を選択する \[21 ページ\]](#)」を参照してください。

## 4.1 システム要件

情報プラットフォームサービスをインストールする場合、以下のガイドラインを確認してください。

- オペレーティングシステムがサポートされていることを確認します。  
Windows .NET Framework 3.5 Service Pack 1 および Windows Installer プログラム 4.5 が必要です。
- インストールプログラムを実行する前に、デプロイメントを拡張 (将来のアップデートや新機能の追加) できるだけの十分な領域がインストール先のパーティションにあるかを確認してください。
- オペレーティングシステムのパーティションにデプロイメントをインストールする場合は、デプロイメントおよびオペレーティングシステムの領域が十分にあることを確認してください。一時ファイルと Web アプリケーションに最低 2 GB の領域を確保することをお奨めします。
- SAP BusinessObjects BI Suite 製品を以前にインストールしたことがある場合、インストールプログラムでは既存のディレクトリが使用されます。
- インストールプログラムを実行するディレクトリのファイルパスの長さが、280 文字以内であることを確認してください。

サポートされるオペレーティングシステムとハードウェアの要件の詳細一覧については、<https://support.sap.com/home.html> で入手可能なサポートされるプラットフォームドキュメントを参照してください。

### 4.1.1 アカウントの権限

Windows ホストに情報プラットフォームサービスをインストールするには、ユーザに以下の権限が必要になります。

カテゴリ	必要なアクセス権
オペレーティングシステム	ローカル管理者権限
ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 適切なポートからデプロイメント内のすべてのマシンへネットワークで接続できること。</li> <li>● デプロイメント内のユーザの共有ファイルシステムディレクトリへアクセスできること。</li> <li>● 適切なネットワーク認証権限。</li> </ul>
データベース	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 情報プラットフォームサービスユーザアカウントでテーブルを作成、編集、および削除する権限。</li> <li>● Central Management Server (CMS) システムデータベースで要求される、情報プラットフォームサービスユーザアカウントでストアードプロシージャを作成する権限。</li> </ul>

### i 注記

ドメインコントローラ、またはデフォルトのローカルの Administrator グループのセキュリティ設定が変更されている Windows ホストへのデプロイメントのインストールはできません。

## 4.1.2 ネットワークの権限

複数のマシンにわたって情報プラットフォームサービスをインストールしている場合は、ネットワークが正しく機能するよう、以下のガイドラインを確認してください。

- どのホストで実行されているサーバも互いに通信する必要があります。
- 各マシンが、Web アプリケーションサーバ、Central Management Server (CMS) ホスト、すべての SIA ホスト、およびクライアントと通信する必要があります。
- インストールプログラムを実行する前に、複数のネットワークインタフェースカード (NIC) を搭載した任意のホストで、プライマリ NIC のルーティングが可能であることを確認してください。プライマリ NIC がルーティングできない場合は、インストール後にネットワークを再設定する必要があります。ルーティング可能な NIC にバインドする方法については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「サーバの管理および設定」に関する章を参照してください。
- 各マシンでは固定ホスト名を使用する必要があります。完全修飾ホスト名がサポートされています。

### i 注記

デプロイメントホスト名に以下の文字が含まれていないことを確認してください。アンダースコア (\_)、ピリオド (.)、バックスラッシュ (\)、フォワードスラッシュ (/)

- ファイアウォールを使用している環境でインストールプログラムを実行する場合は、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「情報プラットフォームサービスのセキュリティ」に関する章を参照してください。

### 4.1.2.1 サーバの場所の選択

分散インストールを計画している場合は、サーバ間の遅延を考慮に入れてください。CMS のパフォーマンスを最適化するために、CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースサーバと同じサブネット上に CMS を設置してください。

CMS はクラスタ化することもでき、クラスタ内の異なるホストシステム上で CMS サーバプロセスを実行できます。CMS クラスタを作成する場合は、CMS システムまたは監査データストアに対し、各コンピュータで同じネットワーク遅延が発生していることを確認してください。

CMS サーバプロセスのクラスタ化の詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「Central Management Server のクラスタ化」の節を参照してください。

## 4.2 CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースの準備

情報プラットフォームサービスにバンドルされたデータベース以外のデータベースサーバを使用するには、情報プラットフォームサービスをインストールする前に、以下のタスクを完了しておく必要があります。

- データベース、(お使いのデータベースに該当する場合はテーブルスペースまたはスキーマ)、およびアカウントを作成し、CMS 設定およびシステム情報を格納します。監査情報を保持するには、2 次テーブルスペースまたはスキーマが必要です。データベース、テーブルスペース、およびアカウント情報を記録すると、情報プラットフォームサービスインストールプログラムにより要求された場合に詳細を入力することができます。

### 警告

既存の情報プラットフォームサービスインストールがある場合、新規データベースを作成し、インストールの完了後に既存のコンテンツを移行する必要があります。

- データベースサーバが UTF-8 などの Unicode 文字エンコードを使用するように設定されていることを確認してください。
- データベースアカウントに、テーブルの作成、変更、削除、およびストアドプロシージャの作成の権限があることを確認してください。
- ネットワーク上でデータベースサーバを使用する場合、情報プラットフォームサービスをインストールする前に適切なデータベースクライアントドライバをインストールし、それが機能していることを確認する必要があります。データベースに必要なドライバを確認するには、データベース管理者に連絡します。

インストール時に、インストールプログラムがデータベースを初期化するための接続および認証情報の入力を求められます。以下の表に、サポートされているデータベースに必要な情報を示します。

テーブル 1:

データベース	インストールプログラムから要求される情報
Microsoft SQL Server (ODBC 使用)	<ul style="list-style-type: none"><li>ODBC DSN 名 (Windows System の DSN リストから選択)</li><li>アカウントのユーザ名</li><li>アカウントのパスワード</li><li>データベース名</li><li>[信頼される接続を使用] チェックボックス</li></ul> <div><b>i 注記</b><ul style="list-style-type: none"><li>Windows NT 認証による ODBC 接続を使用する場合は、信頼される接続が使用されます。インストール中に [信頼される接続を使用] を選択し、システムアカウントがデータベースにアクセスできるようにする必要があります。</li><li>SQL Server 認証 (ユーザ名とパスワード) による ODBC 接続を使用する場合は、信頼される接続は使用されません。[信頼される接続を使用] が選択解除されていることを確認します。</li></ul></div> <ul style="list-style-type: none"><li>[システムデータベースの表示] チェックボックス</li><li>[既存のデータベースのリセット] チェックボックス (推奨設定)</li></ul>

データベース	インストールプログラムから要求される情報
MySQL	<ul style="list-style-type: none"> <li>MySQL データベース名</li> <li>サーバのホスト名</li> <li>ポート番号 (デフォルトは 3306)</li> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>
IBM DB2	<ul style="list-style-type: none"> <li>DB2 エイリアス名</li> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>
Oracle	<ul style="list-style-type: none"> <li>Oracle TNSNAME 接続 ID</li> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>
MaxDB	<ul style="list-style-type: none"> <li>データベース名</li> <li>サーバのホスト名</li> <li>ポート番号 (デフォルトは 7210)</li> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>
Sybase ASE	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービス名</li> </ul> <div> <p><b>i 注記</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Sybase Adaptive Server Enterprise (ASE) サービス名は、データベース管理者が <code>sql.ini</code> ファイルおよびインタフェースファイルで設定したホスト名およびポート番号の組み合わせになります。</li> <li>BI プラットフォームは、指定したユーザのデフォルトデータベースに接続します。デフォルトは、データベース管理者が設定します。</li> </ul> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>
ODBC を使用する Sybase SQL Anywhere	<ul style="list-style-type: none"> <li>DSN</li> <li>アカウントのユーザ名</li> <li>アカウントのパスワード</li> <li>[<a href="#">既存のデータベースのリセット</a>] チェックボックス (推奨設定)</li> </ul>

## 4.2.1 IBM DB2 の追加要件

IBM DB2 には、情報プラットフォームサービスのインストール前に、満たす必要のある要件があります。

- DB2 データベースに次の設定が作成されていることを確認します。

```
Collating Sequence = "Identity"  
Codeset = "UTF-8"  
Territory = "<XX>"
```

<XX> は、使用している環境に適したコードで置き換えます。詳細については、DB2 のマニュアルを参照してください。

DB2 データベースが Collating Sequence = "Identity" に設定されていない場合は、ユーザオブジェクトとユーザグループオブジェクトが CMC で予測通りにソートされない可能性があります。

- BI プラットフォームのインストール前にユーザの一時表スペースを作成します。ユーザの一時表スペースを作成しないと、BI プラットフォームのインストールプログラムは DB2 データベースを設定できません。  
IBM DB2 のユーザの一時表スペースの詳細については、IBM Technical library の *DB2 Basics: Table spaces and buffer pools* (英語) ( <http://www.ibm.com/developerworks/data/library/techarticle/0212wieser/0212wieser.html> ) を参照してください。
- IBM DB2 を使用して監査データストアデータベースをホストする場合は、監査表スペースのページサイズが最低でも 8192 (8 KB) に設定してあることを確認します。
- CMS システムデータベースがパーティション化されていないことを確認してください。監査データストアデータベースはパーティション化できます。

## 4.2.2 Sybase ASE の追加要件

CMS または監査データベースに Sybase ASE を使用する場合は以下のとおりです。

- ページサイズを 8 KB に設定してデータベースを作成します。Sybase データベースのデフォルトのページサイズは 2 KB です。このサイズは、CMS システムデータベースを効率的に実行するには小さすぎます。ページサイズはデータベースの作成中に設定され、データベースの作成後には変更できません。
- UTF-8 などの Unicode 文字セットを使用します。

## 4.3 SAP サポート

### 4.3.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポート

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) とは、インストール済みの SAP ソフトウェアおよび SAP 以外のソフトウェア (オプション) のリストを維持するディレクトリサービスです。SLD では、情報が次の 2 つのカテゴリに大きく分類されています。

- すでにインストールされているソフトウェア
- 後からインストールされる可能性のあるソフトウェア

SAP システムには、ランドスケープディレクトリを自動更新するデータサプライヤ (DS) コンポーネントが付属しています。SLD に対応している SAP 以外のソフトウェアは、オープン API を介して登録されます。インストール済みのソフトウェアについて収集される情報は次のとおりです。

- バージョン
- ホスト情報



- 接続情報

SLD サポートを使用するために、情報プラットフォームサービスをホストしているシステムに SAP Host Agent がインストールされ機能していることを確認します。SAP Host Agent は、情報プラットフォームサービスのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

### 4.3.1.1 SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) サポートを有効にする

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合、SAP Host Agent がインストールされ設定されていることを確認してください。次の手順に従って作業をすると、SAP Host Agent がインストールされます。SAP Host Agent は、情報プラットフォームサービスのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

SAP Host Agent の詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの“システムランドスケープでの情報プラットフォームサービスの登録”に関する項目を参照してください。

#### i 注記

SAP GUI がすでにインストールされている場合は、下の手順 4 に進んでください。

SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポートをインストールするには、管理者権限を持つ `sapadm` ユーザーが必要です。

また `SAP_LocalAdmin` グループも存在し、`sapadm` ユーザーはこのグループのメンバーになっている必要があります。  
SAPHOSTCONTROL のインストール中に、`sapadm` のユーザーパスワードが必要になります。

1. SAP サービスマーケットプレイス (<https://support.sap.com/swdc>) の SAP Software Distribution Center から SAP Host Agent をダウンロードします (SAPHOSTAGENT.SAR)。  
SAP サービスマーケットプレイスの ID でログオンし、ユーザーのシステムに適したバージョンの SAPHOSTAGENT.SAR を見つけます。
2. 次のコマンドを入力して、SAPHOSTAGENT.SAR を抽出します。  

```
sapcar -xvf SAPHOSTAGENT.SAR
```
3. 次のコマンドを入力して、SAPHOSTCONTROL をインストールします。  

```
saphostexec -install
```
4. `sldreg` ツールを探します。このツールは通常次のフォルダに保存されています。  

```
<%Program Files%>%SAP%\hostctrl%\exe
```
5. 以下のコマンドを使用して、SLD キーを作成します。  

```
sldreg -configure connect.key
```

  
SLD サーバに接続するためのユーザー名、パスワード、ホスト、ポートおよびプロトコルの入力を求められます。
6. 要求される情報を入力します。  
`sldreg` ツールは、SLD サーバに情報をプッシュするために `sld-ds` で自動的に使用される `connect.key` ファイルを作成します。

情報プラットフォームサービスのインストールがすでに済んでいる場合は、すべての SIA ノードをセントラル設定マネージャ (CCM) で再起動して SLD に登録します。

## 4.3.2 SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のサポート

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) は、SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のシステムのパフォーマンスを監視します。SMD が収集した情報を使用して、問題の識別、分析、および解決ができます。収集される情報は次のとおりです。

- パフォーマンスモニタリング
- 設定管理
- ログ管理
- ロードテスト
- アラート
- リソース監視

SMD に統合されているツールは次のとおりです。

- CA Wily Introscope  
完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。
- SAP LoadRunner by HP

SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD Agent は、情報プラットフォームサービスのインストールの前または後にインストールして設定することができます。インストール中に、インストールプログラムから SMD エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。SMD を使用しない場合、または後でインストールする場合は、SMD を使用しないことを選択できます。SMD エージェントは、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [プレースホルダ] 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#) を参照してください。

SMD の詳細、または SMD のダウンロードは、SAP サービスマーケットプレイス (<https://support.sap.com/swdc>) にアクセスしてください。

## 4.3.3 CA Wily Introscope のサポート

CA Wily Introscope は SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) の一部として含まれています。完全な計測には、SMD と CA Wily Introscope の両方を使用する必要があります。

CA Wily Introscope と SMD を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。SMD エージェントは、情報プラットフォームサービスのインストールの前または後にインストールして設定することができます。

インストール中に、インストールプログラムから Introscope エージェントのホスト名とポート番号の入力を求められます。Introscope を使用しない場合、または後でインストールする場合は、Introscope を使用しないことを選択できます。Introscope は、後でセントラル管理コンソール (CMC) の [プレースホルダ] 画面で設定できます。詳細については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#) を参照してください。

## 4.4 最終チェックリスト

情報プラットフォームサービスをインストールする前に、以下のチェックリストを確認してください。

- インストール先フォルダを決定しましたか。

#### i 注記

- 出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。
- インストール先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。

- デプロイメントに含まれるすべてのマシン間のネットワーク接続が適切かどうかを確認しましたか。
- 独自のデータベースサーバを使用している場合
  - CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースに対して、データベース、テーブルスペース (必要な場合)、およびアカウントを作成しましたか。
  - BI プラットフォームホストからデータベースにログオンできることを確認しましたか。
  - IBM DB2 または Sybase ASE を使用している場合、そのデータベースが正しい設定で作成されたことを確認しましたか (設定の中には、データベース作成後には変更できないものもあります)。
  - データベースクライアントソフトウェアを正しく設定しましたか。
- 独自の Web アプリケーションサーバを使用している場合
  - 使用する Web アプリケーションサーバを決定しましたか。
  - サーバはすでにインストールおよび設定されていますか。
  - 既存の Web アプリケーションサーバに必要な JDK がインストールされていることを確認しましたか。
- SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) を使用する計画がある場合は、SAP Host Agent のインストールと設定が済んでいることを確認してください。詳細については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) のサポート \[16 ページ\]](#)を参照してください。
- SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用する計画がある場合は、BI プラットフォームの前または後に SMD エージェントをインストールして設定することができます。詳細については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[18 ページ\]](#)を参照してください。

Microsoft Windows でのインストールには、最低画面解像度 1024 x 768 が必要です。

## 5 インストール

情報プラットフォームサービスのインストールプログラムには、次の 2 つの実行方法があります。

- 対話型インストール  
インストールに関連するすべての情報をユーザが選択できる対話型ウィザードを使ってインストールします。このオプションを使用して、一連の画面で個々のインストールオプションを選択できます。これは、デフォルトのインストール方法です。
- サイレントインストール  
インストールオプションはコマンドラインで指定され、インストールプログラムのデフォルト値を上書きします。コマンドラインを使用して、インストールオプションの一部またはすべてを指定できます。インストールオプションがコマンドラインで指定されていない場合、インストールプログラムはデフォルト値を使用します。  
インストールオプションを、コマンドラインで直接指定するのではなく、応答ファイルで指定することができます。この種類のサイレントインストールでは、コマンドラインパラメータに `-r` を使用して、応答ファイルからインストールオプションを読み取ります。複数のマシンに同じ設定でインストールする場合は、このオプションを使用します。応答ファイルに保存されたインストールオプションは、コマンドラインでオプションを指定することによって、上書きできます。  
`-q` (クワイエットモード) スイッチを使用すると、インストールプログラムはインストール中にユーザには入力を一切求めません。

インストールプログラムで予想外の状況が発生し続行できない場合は、その時点まで実行された作業が元に戻され、インストールが開始される前のシステム状態に戻ります。

インストールプログラムが同じインストールされていたバージョンを検知すると、メンテナンスモードになり、ソフトウェアを削除、修復、および変更できます。

### 5.1 対話型のインストールを実行する

インストール前に、使用されるアカウントが管理者権限を持っていることを確認してください。インストールには、使用されるアカウントが Windows の *Administrators* グループのメンバーであること、*Administrators* グループに割り当てられるデフォルトの権限が変更されていないことが必要です。

インストールプログラムには、最小解像度 1024 x 768 ピクセルの画面が必要です。Microsoft Remote Desktop Connection を使用したインストールプログラムの実行は、画面に最小解像度である 1024 x 768 ピクセルが使用されている限り、完全にサポートされています。

#### i 注記

インストールのログファイルは、`<<BOE_INSTALL_DIR>>%InstallData%\logs%\<<DATEandTIME>>%setupengine.log` に保存されます。

1. `setup.exe` を探し、実行します。

### i 注記

Data Services では、対話型インストールを実行するためにライセンスキーが埋め込まれています。この場合、'setup.exe' の代わりに、同じ場所で Windows プラットフォーム用の異なる実行可能ファイル 'InstallIPS.exe' を見つけて実行します。

#### 2. セットアップ言語を選択します。

この言語設定を使用して、インストールプログラムは、ユーザが選択した言語で情報を表示します。英語以外の言語を選択した場合は、対応する言語パックがサーバに自動的にインストールされます。

### i 注記

インストールプログラムは、使用しているオペレーティングシステムと同じ言語で自動的に実行されます。インストールプログラムで使用されている言語に従って、Windows サービス名や [スタート] メニューのショートカットのような、インストールプログラムで設定される Windows コンポーネントに使用される名前が決定されます。これらの名前は、後で変更できず、インストール終了後の言語設定の影響は受けません。

#### 3. [前提条件のチェック] ページで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。

インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。依存関係の要件が重要な場合は、インストールプログラムによってインストールが中止されます。見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、条件を修正するかを選択できます。

#### 4. インストールウィザードのページを確認します。

BI 4.1 SP7 インストーラのインストールウィザード画面に製品出荷マトリックス (PAM) のハイパーリンクが示されます。

インストールウィザード画面が改良され、以下のメッセージが表示されるようになりました。サポートされるプラットフォームの詳細については、以下を参照してください。 <https://support.sap.com/pam>

#### 5. [使用許諾契約] ページで、使用許諾契約を読み、[使用許諾契約に同意する] を選択します。

#### 6. [製品登録の設定] ページで、製品キーを入力します。

### ➡ ヒント

製品の再インストールが必要になった場合のために、製品キーを安全な場所に保管してください。

#### 7. [言語パッケージの選択] ページで、インストールする追加の言語をリストから選択します。

オペレーティングシステムで現在使用されている言語が自動的に選択されます。各言語パックで問題が検知された場合に使用されるため、英語サポートを選択から外したり、アンインストールすることはできません。

[インストールタイプの選択] ページが表示されます。

## 5.1.1 インストールの種類を選択する

[インストールタイプの選択] ページは、実行するインストールのタイプを選択するために使用します。

#### 1. 次のインストールの種類オプションのいずれかを選択します。

##### ○ フル

1 台のマシンに必要なすべてのサーバコンポーネントをインストールします。実稼動前のデプロイメントやテスト環境など、シングルホストデプロイメントを構築するには、このオプションを使用します。

- カスタム/拡張インストール  
上級ユーザは、コンポーネントを個別に選択できます。このオプションは次の場合に使用します。
  - CMS クラスタを作成するなど、複数のホスト間でサーバコンポーネントを分散する場合
  - ホストにデプロイするコンポーネントを完全に制御する場合
- Web Tier  
Web Tier には、セントラル管理コンソール (CMC) などの Web アプリケーションが含まれます。[\[Web Tier\]](#) インストールオプションを使用すると、Java Web アプリケーションが専用の Java Web アプリケーションサーバにインストールされます。  
サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。

2. 次の画面に進んで、選択したインストールの設定を開始します。

[\[インストールフォルダの設定\]](#) ページで、表示されたインストールフォルダを確認します。インストールプログラムにより、このフォルダに BI プラットフォームがインストールされます。フォルダが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。

#### i 注記

- 出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。
- 出力先フォルダが、インストールプログラムが展開されているフォルダと同じフォルダに設定しないようにします。
- すでに SAP BusinessObjects 製品がインストールされている場合は、[\[インストール先フォルダ情報\]](#) フィールドの編集ができなくなっており、既存のフォルダへのパスが表示されます。

3. [\[フル\]](#) インストールを選択した場合は、次のフルの節に進みます。
4. [\[カスタム/拡張\]](#) インストールを選択した場合は、次のカスタム/拡張の節に進みます。
5. [\[Web Tier\]](#) インストールを選択した場合は、次の *Web Tier* の節に進みます。

## 5.1.1.1 完全インストール

情報プラットフォームサービスの完全インストールでは、以下のステップが実行されます。

1. [デフォルトデータベースまたは既存データベースの選択](#) ページで、Central Management Server (CMS) および監査データストア (ADS) 情報を保存するためのデータベースオプションを選択します。

オプション	説明
<a href="#">Sybase SQL Anywhere データベースの設定およびインストール</a>	<p>BI プラットフォームと一緒に使用するデータベースサーバを準備していない場合は、インストールプログラムで Sybase SQL Anywhere をインストールおよび設定することができます。</p> <div> <p>i 注記</p> <p>バンドルされたソフトウェアのサードパーティパッチまたはアップデートのインストールは、サポートされていません。詳細については、<a href="#">情報プラットフォームサービスにバンドルされているサードパーティソリューションへのパッチの適用</a> <a href="#">[55 ページ]</a>を参照してください。</p> </div>

オプション	説明
既存のデータベースの設定	<p>既存のデータベースサーバを使用している場合、インストールプログラムから、CMS システムデータベースおよび監査データベースの両方のデータベースタイプと接続認証情報を入力するよう求められます。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>既存のデータベースには、適切な権限が設定されたユーザアカウントが必要で、適切なドライバがインストールされ、動作することが確認されている必要があります。インストールプロセスの一部として、インストールプログラムにより、データベースへの接続と初期化が試行されます。</p> </div>

お使いのデータベースサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織の要件に最も適したサポート対象データベースを決定することをお勧めします。

2. [既存のデータベースの設定] を選択した場合は、次の作業を行います。
  - a. [既存の CMS データベースタイプの選択] ページで、既存の CMS データベースのデータベースタイプを選択します。
  - b. [既存の監査データベースタイプの選択] ページで、既存の監査データベースのデータベースタイプを選択します。  
監査機能を使用しない場合は、[監査データベースなし] を選択します。
3. [Java Web アプリケーションサーバの選択] ページで、BI プラットフォーム Web アプリケーションをホストするオプションを選択します。

オプション	説明
デフォルトの Tomcat Java Web アプリケーションサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします	<p>BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。BI プラットフォーム Web アプリケーションは Tomcat に自動的にデプロイされます。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>バンドルされたソフトウェアのサードパーティパッチまたはアップデートのインストールは、サポートされていません。詳細については、<a href="#">情報プラットフォームサービスにバンドルされているサードパーティソリューションへのパッチの適用 [55 ページ]</a>を参照してください。</p> </div>
インストール後に、Web アプリケーションを手動でサポートされている Java Web アプリケーションサーバにデプロイします	<p>既存のサポートされている Java Web アプリケーションサーバを使用している場合は、このオプションを選択してから WDeploy ツールを使用して (インストール後に) Web アプリケーションを Java Web アプリケーションサーバにデプロイします。詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>BI プラットフォームでは、インストールプログラムの実行時に、バンドルされた Tomcat Web アプリケーションサーバ以外の Web アプリケーションサーバへの Web アプリケーションの自動デプロイメントはサポートされていません。</p> </div>
Web アプリケーションコンテナサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします	<p>BI プラットフォーム Web アプリケーションのホストに Java アプリケーションサーバを使用しない場合は、このオプションを選択し、Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) でホストすることができます。</p>



お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

#### i 注記

本稼働環境を設定する場合には、Web アプリケーションサーバを BI プラットフォームサーバから独立したシステムでホストすることをお勧めします。本稼働環境で BI プラットフォームサーバと Web アプリケーションサーバを同じホストで実行すると、パフォーマンスが低下する可能性があります。

4. [バージョン管理の選択](#) ページで、Subversion バージョン管理システムをインストールおよび設定するかどうかを決定します。

オプション	説明
<a href="#">Subversion を設定およびインストールします</a>	Subversion バージョン管理システムをインストールして設定します。
<a href="#">この時点ではバージョン管理システムを設定しない</a>	既存のサポートされているバージョン管理システムを使用している場合は、インストールの完了後、セントラル管理コンソール (CMC) で手動で設定する必要があります。詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドを参照してください。

BI プラットフォームでは、バージョン管理システムの CMS リポジトリに存在する BI リソースの異なるバージョンを維持し、必要なときに CMC を使用して、より簡単に以前の設定に戻すことができます。

5. [Server Intelligence Agent \(SIA\) の設定](#) ページで、SIA ノードのデフォルトの名前およびポート番号を確認します。

オプション	説明
<a href="#">ノード名</a>	これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。  この名前は、英数字 (A ~ Z、a ~ z および 0 ~ 9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア (" _ ") は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。
<a href="#">SIA ポート</a>	このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。  ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

6. [\[Central Management Server \(CMS\) の設定\]](#) ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。

このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

7. [\[CMS アカウントの設定\]](#) ページで、CMS 管理者アカウントのパスワードと CMS クラスターキーを入力して確認します。

CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、SAP BusinessObjects サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。

クラスタを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。

8. CMS システムデータベースを設定します。

- a. [\[Sybase SQL Anywhere データベースの設定およびインストール\]](#) を選択した場合は、[\[Sybase SQL Anywhere の設定\]](#) ページでアカウントとポート情報を入力します。



受信データベースクエリをリスニングする、Sybase SQL Anywhere のポート番号を入力します。データベースがこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが適切に設定されていることを確認してください。また、データベース管理者アカウントのパスワードも入力し、確認してください。

- b. [\[既存のデータベースの設定\]](#) を選択した場合は、[\[CMS リポジトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>\]](#) ページで CMS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

ODBC データベースドライバを使用する場合、ODBC データソースを設定する必要があります。システム ODBC DSN は、[▶ スタート ▶ コントロールパネル ▶ 管理ツール ▶ データソース \(ODBC\) ▶](#) から設定できます。

- c. [\[既存のデータベースの設定\]](#) を選択していて、監査を使用する場合は、[\[監査データベースの設定\]](#) ページで ADS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

9. [\[デフォルトの Tomcat Java Web アプリケーションサーバをインストールし、Web アプリケーションを自動でデプロイします\]](#) を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
<a href="#">接続ポート</a>	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
<a href="#">シャットダウンポート</a>	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
<a href="#">リダイレクトポート</a>	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

Tomcat では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

10. [\[Subversion を設定およびインストールします\]](#) を選択した場合は、[\[Subversion の設定\]](#) ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。
11. [\[Solution Manager Diagnostics \(SMD\) エージェントの接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定します</a>	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名およびポート番号を次の <a href="#">SMD エージェントへの接続の設定</a> ページに入力します。
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定しません</a>	インストールプログラムの完了後に、SMD エージェントを CMC <a href="#">ブレースホルダ</a> 画面で設定できます。

## 1 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#) を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランドスケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[49 ページ\]](#) を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[18 ページ\]](#) を参照してください。

- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#)を参照してください。

- [[Introscope Enterprise Manager への接続の選択](#)] ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

### i 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a>	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の <a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a> ページに入力します。
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません</a>	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC <a href="#">ブレースホルダ</a> 画面で設定できます。

[[インストールの開始](#)] ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールプログラムの実行時に進みます。

## 5.1.1.2 カスタム/拡張インストール

情報プラットフォームサービスの [[カスタム/拡張](#)] インストールでは、次の手順を実行します。

選択してインストールできるコンポーネントが [[機能の選択](#)] 画面に表示されます。

- [[機能の選択](#)] ページで、インストールする機能をリストから選択します。

機能は、以下の見出しで分類されています。

- [Web Tier](#)

Web Tier コンポーネントには、BI ラウンチパッドおよびセントラル管理コンソール (CMC) など、エンドユーザと管理者が BI コンテンツおよび BI プラットフォームのインストールを操作できる Web アプリケーションが含まれています。BI プラットフォームと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。

- [サーバ](#)

サーバ機能には、Business Intelligence プラットフォームサーバ (Processing Server および Scheduling Server など)、主要なシステムコンポーネント (CMS、Event Server、バンドルされたデータベース、バージョン管理システムなど)、および BI プラットフォームを組織の既存のネットワークインフラストラクチャ (SAP BW、その他の Enterprise Resource Planning (ERP) システムなど) に統合するサーバが含まれます。

#### i 注記

SAP BW 認証を使用する場合は、[BW パブリッシャサーバ] 機能が [インテグレーションサーバ] 機能の一覧で選択されていることを確認します。

#### ○ 管理者ツール

管理者ツール機能を使って、管理者はインストールを維持できます。たとえば、アップグレードマネジメントツールを使用すると、異なるバージョンの BI プラットフォーム間のアップグレード時に BI コンテンツを移行できます。

#### ○ 開発者ツール

BI プラットフォーム .NET ソフトウェア開発キット (SDK) を使用して独自のアプリケーションを開発する場合は、[開発者ツール] 機能をインストールします。

#### ○ データベースアクセス

組織の既存のデータベース内のデータにアクセスし、データの分析やレポートを行うには、適切な [データベースアクセス] 機能を選択します。組織で特定のデータベースを使用していない場合は、それを選択解除できます。

#### i 注記

- PeopleSoft Enterprise、JD Edwards EnterpriseOne、Siebel、または Oracle EBS Enterprise Resource Planning (ERP) システムの統合は、デフォルトでは選択されていません。ERP シングルサインオン認証、またはその他の ERP 機能を使用する場合は、適切な ERP 機能が [データアクセス] 機能の一覧で選択されていることを確認します。

- SAP、SAP BW、または SAP R3 システムの統合を使用する場合は、[SAPBW] 機能および [SAP] 機能が [データアクセス] 機能の一覧で選択されていることを確認します。

#### ○ サンプル

サンプル機能によって、サンプルレポート、テンプレート、レポーティングデータベースがインストールされます。サンプルが必要ない場合は、選択解除できます。

2. [新規または拡張インストールの選択] ページで、実行するインストールのタイプを選択します。

オプション	説明
新しい情報プラットフォームサービスのデプロイメントの開始	スタンドアロン BI プラットフォームサーバをインストールする場合、またはクラスタに最初のサーバをインストールする場合に選択します。
既存の情報プラットフォームサービスデプロイメントを拡張する	CMS がすでにインストールされており、クラスタの一部として新しいサーバを作成する場合に選択します。

最後の画面で [新しい情報プラットフォームサービスのデプロイメントの開始] を選択した場合は、カスタム (新規) インストールに進みます。

最後の画面で [既存の情報プラットフォームサービスデプロイメントを拡張する] を選択した場合は、カスタム (拡張) インストールに進みます。

## 5.1.1.2.1 カスタム (新規) インストール

カスタム/拡張インストールで新しい情報プラットフォームサービスのデプロイメントの開始オプションを選択した場合は、次の作業を行います。

1. [機能の選択] ページで [Sybase SQL Anywhere データベース] 機能を選択解除した場合、次の作業を行います。

- a. [\[既存の CMS データベースタイプの選択\]](#) ページで、CMS データベースに使用するデータベースタイプを選択します。
- b. [\[既存の監査データベースタイプの選択\]](#) ページで、監査データベースに使用するデータベースタイプを選択します。  
監査機能を使用しない場合は、[\[監査データベースなし\]](#)を選択します。

2. [Server Intelligence Agent \(SIA\) の設定](#) ページで、SIA ノードのデフォルトの名前およびポート番号を確認します。

オプション	説明
<a href="#">ノード名</a>	これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。  この名前は、英数字 (A ~ Z、a ~ z および 0 ~ 9) である必要があり、スペースや句読点は使用できません。アンダースコア (" _ ") は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。
<a href="#">SIA ポート</a>	このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。  ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

3. [\[Central Management Server \(CMS\) の設定\]](#) ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。

このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

4. [\[CMS アカウントの設定\]](#) ページで、CMS 管理者アカウントのパスワードと CMS クラスターキーを入力して確認します。

CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、SAP BusinessObjects サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。

クラスタを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。

5. CMS システムデータベースを設定します。

- a. [\[機能の選択\]](#) ページで [\[Sybase SQL Anywhere データベース\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Sybase SQL Anywhere の設定\]](#) ページでアカウントとポート情報を入力します。

受信データベースクエリをリスニングする、Sybase SQL Anywhere のポート番号を入力します。データベースがこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが適切に設定されていることを確認してください。また、データベース管理者アカウントのパスワードも入力し、確認してください。

- b. [\[機能の選択\]](#) ページで [\[Sybase SQL Anywhere データベース\]](#) 機能を選択解除した場合は、[\[CMS リポジトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>\]](#) ページで CMS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

ODBC データベースドライバを使用する場合、ODBC データソースを設定する必要があります。システム ODBC DSN は、[▶ スタート ▶ コントロールパネル ▶ 管理ツール ▶ データソース \(ODBC\) ▶](#) から設定できます。

- c. [\[機能の選択\]](#) ページで [\[Sybase SQL Anywhere データベース\]](#) 機能を選択解除して、監査を使用する場合は、[\[監査データベースの設定\]](#) ページで ADS で使用する既存のデータベースの接続情報を入力します。

6. [\[サーバの自動開始の選択\]](#) ページで、インストール完了直後にサーバを起動するかどうかを指定します。

[\[いいえ\]](#) を選択すると、インストール完了後にセントラル設定マネージャ (CCM) を使用して手動でサーバを起動する必要があります。

7. [\[機能の選択\]](#) ページで [\[Tomcat\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

Tomcat では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

8. [機能の選択](#) ページで [Web アプリケーションコンテナサーバ](#) または [RESTful Web サービス機能](#) を選択した場合、[HTTP リスニングポートの設定](#) ページで [HTTP リスニングポート](#) 番号を確認します。

WACS では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。

9. [\[機能の選択\]](#) ページで [\[Subversion\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Subversion の設定\]](#) ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。
10. [\[Solution Manager Diagnostics \(SMD\) エージェントの接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定します</a>	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名およびポート番号を次の <a href="#">SMD エージェントへの接続の設定</a> ページに入力します。
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定しません</a>	インストールプログラムの完了後に、SMD エージェントを CMC <a href="#">ブレースホルダ</a> 画面で設定できます。

#### 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#) を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランドスケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[49 ページ\]](#) を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[18 ページ\]](#) を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#) を参照してください。

11. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

## i 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a>	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を次の <a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a> ページに入力します。
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません</a>	インストールプログラムの完了後に、Introscope Enterprise Manager を CMC <a href="#">ブレースホルダ</a> 画面で設定できます。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールプログラムの実行時に進みます。

## 5.1.1.2.2 カスタム (拡張) インストール

[カスタム/拡張] インストールで [\[既存の情報プラットフォームサービスデプロイメントを拡張する\]](#) オプションを選択した場合は、次の作業を行います。

1. [\[既存の CMS データベースタイプの選択\]](#) ページで、既存のリモート CMS データベースのデータベースタイプを選択します。
2. [\[Server Intelligence Agent \(SIA\) の設定\]](#) ページで、新しい SIA ノードのデフォルトの名前とポート番号を確認します。

オプション	説明
<a href="#">ノード名</a>	これは、セントラル設定マネージャ (CCM) に表示される名前です。CMS サーバは、1 つの SIA を使って管理できます。  この名前は、英数字 (A ~ Z, a ~ z および 0 ~ 9) である必要があり、アンダースコアを除くスペースや句読点は使用できません。SIA の名前の先頭に数字は使用できません。
<a href="#">SIA ポート</a>	このポートは、CMS からの受信接続をリスニングするために SIA で使用されます。SIA がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。  ポート 6410 は、BI プラットフォーム SIA で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。

3. [\[既存の CMS デプロイメント情報\]](#) ページで、既存のリモート CMS の接続情報を、管理者パスワードを含めて入力します。
4. [\[CMS アカウントの設定\]](#) ページで、新しい CMS の CMS クラスターキーを入力して確認します。

CMS 管理者は、BI プラットフォーム認証システムのスーパーユーザアカウントで、SAP BusinessObjects サーバ設定の管理にのみ使用されます。これは、オペレーティングシステムやシングルサインオン認証システムの一部ではありません。

クラスタを使用する場合により高いレベルのセキュリティを提供するために、一部の CMS コンポーネント間の通信は暗号化されます。



5. [\[Central Management Server \(CMS\) の設定\]](#) ページで、CMS ポート番号のデフォルト値を確認します。  
このポートを使って、CMS は、Web アプリケーションサーバ、Web サーバ (該当する場合)、他の CMS ノード (該当する場合) およびサーバからの受信接続をリスニングします。CMS がこのポートで受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。  
ポート 6400 は、BI プラットフォーム CMS で使用するため予約されている標準 TCP/IP ポート番号です。
6. [\[CMS リポジトリデータベースの設定 - <データベースタイプ>\]](#) ページで、CMS システムデータベースの接続の詳細を入力します。  
接続を試行している既存の CMS 上で BI プラットフォームにバンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースを使用している場合は、既存の CMS システムデータベースのシステム ODBC DSN 接続を入力します。  
以前インストールした別のデータベースを使用する場合は、CMS の接続認証情報を入力してデータベースに接続します。
7. [\[サーバの自動開始の選択\]](#) ページで、インストール完了直後にサーバを起動するかどうかを指定します。  
[いいえ] を選択すると、インストール完了後にセントラル設定マネージャ (CCM) を使用して手動でサーバを起動する必要があります。
8. [\[Tomcat 7.0\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
接続ポート	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
シャットダウンポート	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
リダイレクトポート	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

9. [\[HTTP リスニングポートの設定\]](#) ページで、WACS が Web クライアントからの受信接続をリスニングする HTTP リスニングポートの番号を確認します。  
WACS では、指定されたポート番号で受信接続を受信できる必要があるため、ファイアウォールが正しく設定されていることを確認してください。
10. [\[Subversion\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Subversion の設定\]](#) ページでポート番号を確認し、Subversion のパスワード (ユーザアカウントは LCM) を入力します。
11. [\[Solution Manager Diagnostics \(SMD\) エージェントの接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の SMD エージェントと統合するかどうかを指定します。

オプション	説明
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定します</a>	BI プラットフォームは、組織の SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) のデプロイメントと統合できます。 このオプションを選択した場合、SMD エージェントのホスト名とポート番号を、次の <a href="#">[SMD エージェントへの接続を設定します]</a> ページで入力します。
<a href="#">SMD エージェントへの接続を設定しません</a>	インストールプログラムが完了した後で、CMC の <a href="#">[ブレースホルダ]</a> 画面で SMD エージェントを設定できます。

### **i** 注記

SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を使用するには、SAP Host Agent と SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SAP Host Agent をインストールする方法については、[SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SAP Host Agent をインストールする方法については、[インストール後のシステムランドスケープディレクトリ \(SLD\) データサプライヤ \(DS\) の設定 \[49 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[18 ページ\]](#)を参照してください。
- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#)を参照してください。

12. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

#### **i** 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

オプション	説明
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a>	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を、次の <a href="#">[Introscope Enterprise Manager への接続の設定]</a> ページで入力します。
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません</a>	インストールプログラムが完了した後で、CMC の <a href="#">[ブレースホルダ]</a> 画面で Introscope Enterprise Manager を設定できます。

[\[インストールの開始\]](#) ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールプログラムの実行時に進みます。

### 5.1.1.3 Web Tier インストール

Web Tier は、セントラル管理コンソール (CMC) などの Web アプリケーションをホストして、Web 上のユーザにコンテンツを提供します。[\[Web Tier\]](#) インストールオプションを使用すると、BI プラットフォーム Java Web アプリケーションが専用の Java Web アプリケーションサーバにインストールされます。

#### **i** 注記

- Web Tier のインストール中に、BI プラットフォーム管理者アカウントを使用して、既存の Central Management Server (CMS) にログインするよう求められます。Web Tier のインストールを実行するには、CMS をリモートまたは同じコンピュータで実行している必要があります。
- サードパーティ認証、または SAP BW、Siebel Enterprise、JD Edwards EnterpriseOne、Oracle E-Business Suite などの Enterprise Resource Planning (ERP) システムの統合で Web Tier を使用する場合、[\[カスタム/拡張\]](#) インストールを実行して、必要なコンポーネントを選択する必要があります。  
たとえば、SAP BW と SAP 認証サポートを含む Web Tier インストールを実行するには、[\[カスタム/拡張\]](#) 機能一覧で次のコンポーネントを選択します。



- [インスタンス](#) > [WebTier](#) > [Java Web アプリケーション](#)】
- [インスタンス](#) > [WebTier](#) > [Tomcat 7.0](#)】(Web アプリケーションサーバを未設定の場合)
- [インスタンス](#) > [データベースアクセス](#) > [SAPBW](#)】
- [インスタンス](#) > [データベースアクセス](#) > [SAP](#)】

別の ERP システムのサポートを伴う Web Tier インストールを実行するには、次を選択します。

- [インスタンス](#) > [WebTier](#) > [Java Web アプリケーション](#)】
- [インスタンス](#) > [WebTier](#) > [Tomcat 7.0](#)】(Web アプリケーションサーバを未設定の場合)
- [インスタンス](#) > [データベースアクセス](#)】(ERP システムの名前を選択)

情報プラットフォームサービスと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。このオプションでは、Web アプリケーションは Web アプリケーションサーバにデプロイされません。Web Tier インストール後に Web アプリケーションサーバに Web アプリケーションをデプロイするには、WDeploy ツールを使用します。WDeploy ツールの使用の詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。

情報プラットフォームサービスの [\[Web Tier\]](#) インストールでは、次の手順を実行します。

1. [\[機能の選択\]](#) ページで、[インスタンス](#) > [WebTier](#) の下からインストールする機能を選択します。

オプション	説明
<a href="#">Java Web アプリケーション</a>	BI プラットフォーム Web アプリケーションをコンピュータにインストールします。
<a href="#">Tomcat 7.0</a>	バンドルされている Apache Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールして設定します。

2. [\[Tomcat 7.0\]](#) 機能を選択した場合は、[\[Tomcat の設定\]](#) ページでデフォルトのポート値を確認します。

オプション	説明
<a href="#">接続ポート</a>	Web アプリケーションサーバが Web クライアントからの受信接続をリスニングするポート。
<a href="#">シャットダウンポート</a>	Web アプリケーションをリモートでシャットダウンできるポート。
<a href="#">リダイレクトポート</a>	リダイレクトによって Web 接続をセキュリティ保護できるポート。

3. [\[既存の CMS デプロイメント情報\]](#) ページで、既存の CMS にログインします。
4. [\[Introscope Enterprise Manager への接続の選択\]](#) ページで、BI プラットフォームを既存の Introscope Enterprise Manager サーバと統合するかどうかを指定します。

#### 注記

CA Wily Introscope Enterprise Manager を使用するには、SMD エージェントをインストールする必要があります。

- BI プラットフォームの前に SMD エージェントをインストールする方法については、[SAP Solution Manager Diagnostics \(SMD\) のサポート \[18 ページ\]](#)を参照してください。

- BI プラットフォームの後に SMD エージェントをインストールする方法については、[インストール後に SMD エージェントを設定する \[50 ページ\]](#)を参照してください。

オプション	説明
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続の設定</a>	BI プラットフォームは、組織の CA Wily Introscope Enterprise Manager デプロイメントと統合できます。  このオプションを選択した場合、Introscope Enterprise Manager サーバのホスト名とポート番号を、次の <a href="#">[Introscope Enterprise Manager への接続の設定]</a> ページで入力します。
<a href="#">Introscope Enterprise Manager への接続を設定しません</a>	インストールプログラムが完了した後で、CMC の <a href="#">[ブレースホルダ]</a> 画面で Introscope Enterprise Manager を設定できます。

[\[インストールの開始\]](#) ページが表示されます。インストールを開始します。

インストールプログラムの実行時に進みます。

## 5.1.2 インストールプログラムの実行時

進捗バーは、インストール全体の進捗状況を示します。

インストールプログラムによって SAP アクティビティおよびリソースの監視ツールがインストールされます。これらのツールを使用して、問題が発生したときにインストールの詳しい技術情報を取得できます。

## 5.1.3 インストール完了時

インストールが完了したら、[\[インストール後の手順\]](#) 画面の情報を確認します。バンドルされている Tomcat Web アプリケーションサーバを使用していない場合は、WDeploy Web アプリケーションデプロイメントツールを使用して Web アプリケーションをデプロイする必要があります。Web アプリケーションの Java Web アプリケーションサーバへのデプロイメントの詳細については、[SAP BusinessObjects Enterprise Web アプリケーションデプロイメントガイド](#)を参照してください。

### 5.1.3.1 再起動の回避

インストール時にファイルがロックされている場合、インストール後にサーバを再起動するように促される可能性があります。すぐに再起動する、または後で再起動することができます。ただし、後で再起動することを選択した場合、システムは、再起動するまでサポートされない状態となる可能性があります。インストールログには、インストールプロセスの終了時に再起動されるかどうかが記録されます。

## 5.2 サイレントインストールを実行する

インストールウィザードの各オプションは、コマンドラインで起動した応答ファイルから読み取ることができます。これを、サイレントインストールといいます。

応答ファイルとは、インストールオプションパラメータをキー値形式で含むテキストファイルです。応答ファイルを使用してインストールオプションを指定する場合、インストールプログラムはコマンドラインから、`-r <<応答ファイル>>` パラメータを使って実行され、ここで `<<応答ファイル>>` は応答ファイルの名前です。

応答ファイルには、インストールオプションが各行に 1 つ指定されている複数のインストールオプションが含まれます。次の例では、応答ファイルがパラメータとして指定されています。

```
setup.exe [...] -r C:\¥response.ini [...]
```

たとえば、インストールオプション `cmsport=6401` を応答ファイルの行に指定すると、CMS ポート番号がデフォルト値の 6400 の代わりに 6401 に設定されます。

応答ファイルに `cmsport` パラメータを指定する以下の例では、省略記号 (`[...]`) で表示されているところは、通常他のインストールオプションが存在していることを示しています。

```
[...]  
cmsport=6401  
[...]
```

### i 注記

インストールプログラムにより、起動時にコマンドラインプロンプトにカーソルが返されます。スクリプトからインストールプログラムを実行するか、インストールプログラムの完了を、コマンドラインに戻るまで強制的に待機させるには、Windows Command Interpreter の `start /wait` コマンドを使用して `setup.exe` を呼び出します。

以下はその例です。

```
start /wait setup.exe [<<COMMAND_LINE_OPTIONS>>]
```

インストールオプションの完全な一覧については、[インストールオプションのパラメータ \[37 ページ\]](#)を参照してください。応答ファイルの例については、[応答ファイルの例 \[42 ページ\]](#)を参照してください。

### 5.2.1 コマンドラインスイッチパラメータ

以下の表は、サイレントインストールを実行するためにコマンドラインでインストールプログラムに指定することができるスイッチパラメータです。

テーブル 2: インストールプログラムのコマンドラインスイッチパラメータ

スイッチパラメータ	説明	例
<code>-w &lt;&lt;FILENAME&gt;&gt;</code>	応答ファイルを <code>&lt;&lt;FILENAME&gt;&gt;</code> に書き込みます。これには、インストールウィザードで選択されたオプションを含みます。	<code>setup.exe -w "C:\¥response.ini"</code>

スイッチパラメータ	説明	例
-r <<FILENAME>>	<<FILENAME>> というファイル名の応答ファイルからインストールオプションを読み込みます。	setup.exe -r "C:¥response.ini"

### 5.2.1.1 応答ファイルを使用する

応答ファイルを使用するには、インストールプログラムを -r <<RESPONSE\_FILE>> パラメータ付きで実行します。インストールプログラムは、すべてのインストールオプションを応答ファイルから読み込むため、その後の入力はありません。

たとえば、次のコマンドはインストールオプションを応答ファイル C:¥response.ini から読み込みます。

```
setup.exe -r C:¥response.ini
```

応答ファイル内のインストールオプションを上書きするには、コマンドラインでオプションを指定します。コマンドラインで指定されたインストールオプションは、応答ファイル内のオプションよりも優先されます。インストールオプションの全リストについては、以下のインストールオプションのパラメータを参照してください。

予期せぬ条件が発生した場合、エラーメッセージがインストールログファイルに書き込まれ、インストールプログラムは終了します。インストールのアクティビティ、警告、およびエラーは、以下のフォルダ内のインストールログファイルに書き込まれます。

```
<<BOE_INSTALL_DIR>>¥InstallData¥logs¥<<DATEandTIME>>¥setupengine.log
```

インストールプログラムの終了時まで、<<BOE\_INSTALL\_DIR>> フォルダが作成されない場合は、システムの <TEMP> 環境変数で指定された一時フォルダ内にある install.log を確認してください。

#### 5.2.1.1.1 応答ファイルを記述する

応答ファイルを作成するには、インストールプログラムを -w <<RESPONSE\_FILE>> パラメータ付きで実行し、インストールウィザードで任意のインストールオプションを選択します。ウィザードが完了すると、インストールプログラムが終了し、応答ファイルが作成されます。これで、今後のインストールで応答ファイルを使用できるようになります。

たとえば、次のコマンドでは、応答ファイル C:¥response.ini を作成します。

```
setup.exe -w C:¥response.ini
```

一度作成すると、応答ファイルはテキストエディタで更新することができます。

#### i 注記

GUI インストールプログラムで応答ファイルを作成する場合、GUI を介して入力したライセンスキーおよび一部のパスワードはプレーンテキスト形式の応答ファイルには書き込まれません。サイレントインストールを実行する前に、アスタリスク (\*\*\*\*\*) の部分を実際のパスワードに置き換える必要があります。

## 5.2.1.1.2 応答ファイルを読み込む

応答ファイルのインストールは、コマンドラインで開始されますが、インストールオプションは、オプションがキー値形式で保存された ASCII テキストファイルから読み込まれます。これは、クラスタを設定したり、標準化されたオプションで開発環境またはテスト環境を構築する場合に有用です。

オプションがコマンドラインと応答ファイルの両方で指定された場合、コマンドラインオプションが応答ファイルオプションより優先されます。これにより、管理者は必要に応じて、応答ファイル内のオプションを上書きすることができます。インストールオプションの優先順位には 3 段階あります。

1. コマンドラインで指定されるインストールオプションは最優先され、応答ファイルおよびデフォルト値を常に上書きします。
2. 応答ファイルで指定されるインストールオプションは、コマンドラインで指定されない場合に使用され、デフォルト値を上書きします。
3. インストールオプションのデフォルト値は、コマンドラインでも応答ファイルでも指定されない場合に使用されます。

たとえば、以下のコマンドは応答ファイル `C:\¥response.ini` からインストールオプションを読み込みますが、応答ファイルのインストール先フォルダの設定を上書きします。

```
setup.exe -r C:\¥response.ini InstallDir="C:\¥SAP¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥"
```

## 5.2.2 インストールオプションのパラメータ

テーブル 3: インストールオプションのパラメータ

パラメータ	説明
<code>chooseintroscopeintegration=&lt;&lt;VALUE&gt;&gt;</code>	Introscope サポートを有効にするかどうかを決定します。Introscope 統合を有効化するには、<<VALUE>> を <code>integrate</code> に設定します。SMD 統合を無効化するには、<<VALUE>> を <code>nointegrate</code> に設定します。
<code>choosesmdintegration=&lt;&lt;VALUE&gt;&gt;</code>	SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) エージェントサポートを有効にするかどうかを決定します。SMD 統合を有効化するには、<<VALUE>> を <code>integrate</code> に設定します。SMD 統合を無効化するには、<<VALUE>> を <code>nointegrate</code> に設定します。
<code>clusterkey=&lt;&lt;KEY&gt;&gt;</code>	暗号化された安全な CMS クラスタ通信に使用される暗号化キー。<<KEY>> にキー文字列を代入します。
<code>cmspassword=&lt;&lt;PASSWORD&gt;&gt;</code>	CMS 管理者アカウントで使用するパスワード。<<PASSWORD>> にパスワードを代入します。
<code>cmsport=&lt;&lt;PORT&gt;&gt;</code>	受信接続用に CMS で使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<<PORT>> にポート番号を代入します。デフォルト値は 6400 です。
<code>enableservers=&lt;&lt;SWITCH&gt;&gt;</code>	インストールの完了後に、自動的に CMS サーバを起動するかどうかを決定します。インストール後に自動的にサーバを有効化するには、<<SWITCH>> に 1 を設定します。サーバを有効化しないようにするには、後で手動で実行できるように、<<SWITCH>> に 0 を設定します。

パラメータ	説明
installdir=<<PATH>>	<p>セットアッププログラムがプログラムをインストールするインストール先フォルダです。</p> <p>すでに情報プラットフォームサービスがインストールされているホストにインストールする場合、installdir の値は自動的に既存のインストールと同じパスに設定されます。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>出力先フォルダの Unicode 文字の使用はサポートされていません。</li> <li>出力先フォルダが、インストールプログラムが展開されているのと同じフォルダではないことを確認します (現在の作業ディレクトリからインストールプログラムを実行中に、現在の作業ディレクトリにインストールしないでください)。</li> </ul> </div>
installtype=<<VALUE>>	<p>デフォルト設定、カスタム設定 (ユーザがコンポーネントを選択可能)、または Web Tier コンポーネントのインストールに使用される設定 (Web アプリケーションサーバへのインストール時) に基づいて、インストールプログラムがインストール可能なコンポーネントを選択する必要があるかどうかを決定します。デフォルトコンポーネントをインストールするには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt; を default に設定します。コンポーネントのカスタム選択をインストールするには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt; を custom に設定します。Web Tier コンポーネントをインストールするには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt; を webtier に設定します。</p>
introscope_ent_host=<<HOSTNAME>>	<p>Introscope サーバのホスト名。&lt;&lt;HOSTNAME&gt;&gt; に Introscope サーバのホスト名を代入します。</p>
introscope_ent_port=<<PORT>>	<p>Introscope サーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。&lt;&lt;PORT&gt;&gt; に Introscope サーバのポート番号を代入します。</p>
lcmname=LCM_Repository	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバのホスト名。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>この値は変更しないでください。</p> </div>
lcmpassword=<<PASSWORD>>	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバにアクセスするためのユーザパスワード。&lt;&lt;PASSWORD&gt;&gt; にパスワードを代入します。</p>
lcmport=<<PORT>>	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。&lt;&lt;PORT&gt;&gt; にポート番号を代入します。</p>
lcmusername=LCM	<p>SAP ライフサイクルマネジメントサーバにアクセスするためのユーザ名。</p> <div> <p><b>i 注記</b></p> <p>この値は変更しないでください。</p> </div>
neworexistinglcm=<<VALUE>>	<p>このインストールが、未使用のサーバへの LCM なのか、CMS クラスタの作成に使用される拡張インストールなのかを決定します。新しいインストールを実行するには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt; を new に設定します。拡張インストールを実行するには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt; を expand に設定します。</p>

パラメータ	説明
productkey=<<KEY>>	ソフトウェア購入時に発行された製品のライセンスキー。<<KEY>>にXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXという形式の製品キーを代入します。
registeredcompany=<<NAME>>	ソフトウェアの登録者となる会社の名前。<<NAME>>に名前を代入します。
registereduser=<<NAME>>	ソフトウェアの登録者となるユーザの名前。<<NAME>>に名前を代入します。
selectedlanguagepacks=<<CODE>>	<p>ユーザおよび管理者が、サポートされている言語で情報プラットフォームサービスと対話するために言語サポートをインストールします。1つ以上の言語パックをインストールする場合、各コードをスペースなしのセミコロンで区切り、引用符で囲んで指定したリストを使用してください。以下の例では、英語、日本語、簡体字中国語、およびタイ語の言語サポートがインストールされます。</p> <pre>SelectedLanguagePacks="en;ja;zh_cn;th"</pre> <p>&lt;&lt;CODE&gt;&gt;に以下の言語コードを代入します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アラビア語: ar</li> <li>チェコ語: cs</li> <li>デンマーク語: da</li> <li>オランダ語: nl</li> <li>英語: en</li> <li>フィンランド語: fi</li> <li>フランス語: fr</li> <li>ドイツ語: de</li> <li>ハンガリー語: hu</li> <li>イタリア語: it</li> <li>日本語: ja</li> <li>韓国語: ko</li> <li>ノルウェー語 (ブークモール): nb</li> <li>ポーランド語: pl</li> <li>ポルトガル語: pt</li> <li>ロシア語: ru</li> <li>簡体字中国語: zh_cn</li> <li>スロバキア語: sk</li> <li>スロベニア語: sl</li> <li>スペイン語: es</li> <li>スウェーデン語: sv</li> <li>タイ語: th</li> <li>繁体字中国語: zh_tw</li> <li>トルコ語: tr</li> </ul>
selectintegrateddatabase=<<VALUE>>	<p>バンドルされているデータベースをインストールするかどうかを指定します。バンドルされているデータベースをインストールするには、&lt;&lt;VALUE&gt;&gt;を1に設定します。</p> <p>バンドルされているデータベースは Sybase SQL Anywhere です。</p>

パラメータ	説明
setupuilanguage=<<CODE>>	<p>インストール中に使用するインストールプログラムの言語を指定します。&lt;&lt;CODE&gt;&gt; が次の場合、言語コードを代入します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• チェコ語: cs</li> <li>• デンマーク語: da</li> <li>• オランダ語: nl</li> <li>• 英語: en</li> <li>• フィンランド語: fi</li> <li>• フランス語: fr</li> <li>• ドイツ語: de</li> <li>• ハンガリー語: hu</li> <li>• イタリア語: it</li> <li>• 日本語: ja</li> <li>• 韓国語: ko</li> <li>• ノルウェー語 (ブークモール): nb</li> <li>• ポーランド語: pl</li> <li>• ポルトガル語: pt</li> <li>• ロシア語: ru</li> <li>• 簡体字中国語: zh_cn</li> <li>• スロバキア語: sk</li> <li>• スロベニア語: sl</li> <li>• スペイン語: es</li> <li>• スウェーデン語: sv</li> <li>• タイ語: th</li> <li>• 繁体字中国語: zh_tw</li> <li>• トルコ語: tr</li> </ul>
sianame=<<NAME>>	<p>このインストールで作成する Server Intelligence Agent (SIA) のノード名。名前は半角英数字である必要があり、先頭に数字は使用できません。&lt;&lt;NAME&gt;&gt; に SIA 名を代入します。</p>
siaport=<<PORT>>	<p>SIA で使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。&lt;&lt;PORT&gt;&gt; にポート番号を代入します。</p>
smdagent_host=<<HOSTNAME>>	<p>SMD エージェントのホスト名。&lt;&lt;HOSTNAME&gt;&gt; にエージェントのホスト名を代入します。</p>
smdagent_port=<<PORT>>	<p>SMD エージェントで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。&lt;&lt;PORT&gt;&gt; にエージェントのポート番号を代入します。</p>
sqlanywhereadminpassword=<<PASSWORD>>	<p>Sybase SQL Anywhere dba 管理ユーザアカウントに割り当てる管理パスワード。&lt;&lt;PASSWORD&gt;&gt; にパスワードを代入します。</p>
sqlanywhereport=<<PORT>>	<p>BI プラットフォームにバンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。&lt;&lt;PORT&gt;&gt; にデータベースサーバのポート番号を代入します。</p>



パラメータ	説明
tomcatconnectionport=<<PORT>>	受信接続用に Tomcat Web アプリケーションサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<<PORT>> にポート番号を代入します。
tomcatredirectport=<<PORT>>	サーバリクエストのリダイレクトのために Tomcat Web アプリケーションサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<<PORT>> にポート番号を代入します。
tomcatshutdownport=<<PORT>>	サーバシャットダウンをトリガするために Tomcat Web アプリケーションサーバで使用されるネットワーク TCP リスニングポート番号。<<PORT>> にポート番号を代入します。
webappservertype=<<VALUE>>	Web アプリケーションのデプロイメントに使用する Web アプリケーションサーバを設定します。デフォルト値は tomcat です。WDeploy ツールを使用して Web アプリケーションをデプロイする前に、手動で WDeploy 設定ファイルを更新する必要があります。詳細については、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイドを参照してください。
features=<<CODE>>	<p>インストールするコンポーネントのリストです。installtype=custom または installtype=webtier パラメータの組み合わせで使用されます。このパラメータは手動で変更しないでください。機能は、応答ファイルの作成時にインストールプログラムのユーザインタフェースを使用して選択する必要があります。</p> <p>機能コードの全リストについては、<a href="#">機能コード [41 ページ]</a>機能コードを参照してください。</p>

## 5.2.2.1 機能コード

インストールの機能を選択するには、以下の機能コードを使用します。複数の機能はカンマで区切ります。

- root: すべての機能のインストール
  - WebTier: すべての Web Tier コンポーネントのインストール
    - JavaWebApps1 Java Web アプリケーション
    - PlatformServers.WebAppContainerService
    - CMC.Monitoring
    - LCM (Lifecycle Manager)
    - IntegratedTomcat (バンドルされた Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールします)
    - CMC.AccessLevels
    - CMC.Applications
    - CMC.Audit
    - CMC.Authentication
    - CMC.Calendars
    - CMC.Categories
    - CMC.CryptographicKey
    - CMC.Events
    - CMC.Folders (パブリックフォルダ)

- CMC.Inboxes
- CMC.Licenses
- CMC.PersonalCategories
- CMC.PersonalFolders
- CMC.Servers
- CMC.Sessions
- CMC.Settings
- CMC.TemporaryStorage
- CMC.UsersAndGroups
- CMC.QueryResults
- CMC.InstanceManager
- PlatformServers: すべてのプラットフォームサーバのインストール
  - CMS (Central Management Server)
  - FRS (File Repository Servers)
  - PlatformServers.IntegratedDB.SQLAnywhere (バンドルされている Sybase SQL Anywhere データベースサーバのインストール)
  - PlatformServers.AdaptiveProcessingServer (プラットフォーム処理サービス)
  - PlatformServers.AdaptiveJobServer (プラットフォームスケジュールサービス)
  - ClientAuditingProxyProcessingService
  - LCMProcessingServices (ライフサイクルマネジメント処理サービス)
  - MonitoringProcessingService
  - SecurityTokenService
  - AdvancedAnalysisServices
    - MultidimensionalAnalysisServices
  - DestinationSchedulingService (プログラムスケジュールサービス)
  - ProgramSchedulingService
  - Subversion
- AdminTools: すべての管理者ツールのインストール
  - UpgradeManager (アップグレードマネジメントツール)
- DataAccess: すべての企業資源計画 (ERP) アクセスコンポーネントのインストール
  - DataAccess.SAP
  - DataAccess.Peoplesoft (PeopleSoft Enterprise)
  - DataAccess.JDEdwards (JD Edwards EnterpriseOne)
  - DataAccess.Siebel (Siebel Sign-on Server)
  - DataAccess.OracleEBS (Oracle E-Business Suite)

### 5.2.2.2 応答ファイルの例

情報プラットフォームサービスのインストールオプションを含む応答ファイルの例は次のとおりです。

#### ➡ ヒント

例となる `response.ini` という応答ファイルも、インストールパッケージに含まれています。



例

## response.ini

```
# InstallDir requires a trailing slash
InstallDir=C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\
SelectedLanguagePacks=en
ProductKey=XXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXX
SetupUILanguage=en
InstallType=default
CMSPort=6400
CMSPassword=Password1
ClusterKey=Password1
SIAName=sia
SIAPort=6410
# Change this to "0" if you want to use existing db
SelectIntegratedDatabase=1
SQLAnywhereAdminPassword=Password1
SQLAnywherePort=2638
TomcatConnectionPort=8080
TomcatRedirectPort=8005
TomcatShutdownPort=8443
EnableServers=1
RunMonitorTool=0
LCMName=localhost
LCMPort=10004
LCMUserName=Administrator
LCMPassword=Password1
NewOrExistingLCM=new
# Choose your existing database types
UsingCMSDBType=sqlanywhere
UsingAuditDBType=sqlanywhere
# Enter appropriate values for the db type
ExistingCMSDBServer=www
ExistingCMSDBPort=111
ExistingCMSDBDatabase=xxx
ExistingCMSDBUser=yyy
ExistingCMSDBPassword=zzz
ExistingCMSDBReset=1
# Enter appropriate values for the db type
ExistingAuditingDBServer=aaa
ExistingAuditingDBPort=111
ExistingAuditingDBDatabase=bbb
ExistingAuditingDBUser=ccc
ExistingAuditingDBPassword=ddd
#Enter appropriate values for the Introscope
Introscope_ENT_HOST=localhost
Introscope_ENT_PORT=6001
Introscope_ENT_INSTRUMENTATION=10
#Enter appropriate values for the SMD Agent
SMDAgent_HOST=localhost
SMDAgent_PORT=6001
#WACS Port
WACSPort=6405
# The acceptable value of WebAppServerType: tomcat/wacs/manual/none
WebAppServerType=tomcat
#Choose to Integrated Introscope: integrate or nointegrate
ChooseIntroscopeIntegration=nointegrate
### Choose to Integrate Solution Manager Diagnostics (SMD) Agent: integrate or
nointegrate
choosesmdintegration=nointegrate
#List the features installed by default
#List the features installed by default
features=JavaWebApps1,CMC.Monitoring,LCM,IntegratedTomcat,CMC.AccessLevels,CMC.App
lications,CMC.Audit,CMC.Authentication,CMC.Calendars,CMC.Categories,CMC.Cryptograp
hicKey,CMC.Events,CMC.Folders,CMC.Inboxes,CMC.Licenses,CMC.PersonalCategories,CMC.
PersonalFolders,CMC.Servers,CMC.Sessions,CMC.Settings,CMC.TemporaryStorage,CMC.Use
```

```
rsAndGroups,CMC.QueryResults,CMC.InstanceManager,CMS,FRS,PlatformServers.IntegratedDB.SQLAnywhere,PlatformServers.AdaptiveProcessingServer,PlatformServers.AdaptiveJobServer,ClientAuditingProxyProcessingService,LCMProcessingServices,MonitoringProcessingService,SecurityTokenService,MultidimensionalAnalysisServices,AdvancedAnalysisServices,PlatformServers.SystemLandscapeSupplier,DestinationSchedulingService,ProgramSchedulingService,Subversion,UpgradeManager,AdminTools,DataAccess.SAP,DataAccess.Peoplesoft,DataAccess.JDEdwards,DataAccess.Siebel,DataAccess.OracleEBS,DataAccess
```

## 5.3 段階的インストールを実行する

BI プラットフォームインストーラでは、インストールは 2 段階 (キャッシュとキャッシュ後のインストール) に分割されて実行されます。

キャッシュは、ソフトウェアをインストールディレクトリにコピーするプロセスです。キャッシュ段階ではシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

キャッシュ段階が完了したら、インストールを終了し、メンテナンス時間があるときにインストールを再開することができます。

キャッシュ後のインストールは、実際のインストールプロセスです。キャッシュ後のインストール段階では、システムダウンタイムが発生します。

段階的インストールでは、全体的なシステムダウンタイムが短縮されます。

キャッシュは、ソフトウェアをインストールディレクトリにコピーするプロセスです。

### 5.3.1 新しいインストールの段階的インストールを実行する

段階的インストールを実行するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. コマンドプロンプトに移動します。
2. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
3. 「setup.exe -cache <path><file name>」と入力します。



例

```
setup.exe -cache c:\¥response.ini
```

4. [セットアップ言語を選択してください] ウィンドウで、セットアップ言語を選択します。  
セットアップ言語を設定することにより、インストール時の情報が選択した言語で表示されるようになります。
5. 前提条件のチェックウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。  
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。

- 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
  - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
6. **インストールウィザード**ウィンドウで、表示された指示を確認します。
  7. **使用許諾契約**ウィンドウで、使用許諾契約を確認して同意します。
  8. **製品登録の設定**ウィンドウで、製品キーを入力します。
  9. **言語パッケージの選択**ウィンドウで、インストールする追加言語を一覧から選択します。  
オペレーティングシステムにより、現在使用されている言語が自動的に選択されます。オペレーティングシステムにより各言語で問題が検知された場合、BI プラットフォームでは英語が使用されるため、英語サポートを選択から外すことはできません。

#### 注記

[**言語パッケージの選択**] ウィンドウでは、チェックボックスを選択して言語パックを追加または削除することができます。

10. **インストールタイプの選択**ウィンドウで、インストールタイプのいずれかを選択します。
  - フルインストール: [**フル**] インストールを選択した場合は、[**フルインストール**] の節に進みます。
  - カスタム/拡張インストール: [**カスタム/拡張**] インストールを選択した場合は、[**カスタム/拡張インストール**] の節に進みます。
  - Web Tier: [**Web Tier**] インストールを選択した場合は、[**Web Tier インストール**] の節に進みます。
11. [**インストールの開始**] ウィンドウで [**次へ**] を選択してキャッシュを開始します。
12. [**キャッシュが正常に完了しました**] ダイアログが表示されます。

#### 注記

キャッシュ段階ではシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

13. response.ini ファイルディレクトリの場所に移動します。
14. パスワードと製品キーを入力し、response.ini ファイルを保存します。

#### 例

[**CMS クラスターキー**]、[**管理者パスワード**]、[**SQL Anywhere パスワード**] の各情報を入力します。

15. コマンドプロンプトに移動します。
16. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
17. 「setup.exe -resume\_after\_cache <path><file name>」と入力します。

#### 例

```
setup.exe -resume_after_cache c:\¥response.ini
```

18. [**インストールを再開します**] ウィンドウで、[**OK**] を選択します。
19. [**インストール後の手順**] ウィンドウで、指示に従って操作し、[**次へ**] を選択します。

情報プラットフォームサービス 4.1 SP8 のインストールが正常に完了します。

#### i 注記

- キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、システムダウンタイムは全体的に短縮されます。
- インストールを開始すると、インストーラによりキャッシュ中に発生したエラーが修復され、インストールが続行されます。

## 5.3.2 アップデートインストールの段階的インストールを実行する

パッチアップデートの段階的インストールを実行するには、以下の手順を実行する必要があります。

1. コマンドプロンプトに移動します。
2. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
3. 「`setup.exe -cache <path><file name>`」と入力します。

#### 例

```
setup.exe -cache c:\¥response.ini
```

4. **前提条件のチェック**ウィンドウで、結果を確認し、インストールを続行するか、中止して要件に満たない部分を修正するかを選択します。  
インストールプログラムによって必要なコンポーネントと条件がチェックされます。
  - 依存関係の前提条件が重要な場合は、インストールを続行することができません。
  - 見つからない、またはサポートされていないコンポーネントがオプションの場合は、インストールを続行するか、中止して条件を修正するかを選択することができます。
5. **インストールウィザード**ウィンドウで、表示された指示を確認します。
6. **使用許諾契約**ウィンドウで、使用許諾契約を確認して同意します。
7. **既存の CMS デプロイメント情報**ウィンドウで、[**CMS ログオン管理者情報**] のパスワードを入力します。
8. [**インストールの開始**] ウィンドウで [**次へ**] を選択してキャッシュを開始します。
9. [**キャッシュが正常に完了しました**] ダイアログが表示されます。

#### i 注記

キャッシュ段階ではシステムダウンタイムが発生しないため、システムで作業を続けることができます。

10. response.ini ファイルディレクトリの場所に移動します。
11. [**リモート CMS 管理者パスワード**] を入力し、response.ini ファイルを保存します。
12. コマンドプロンプトに移動します。
13. ソフトウェアをダウンロードする場所を入力します。
14. 「`setup.exe -resume_after_cache <path><file name>`」と入力します。



例

```
setup.exe -resume_after_cache c:¥response.ini
```

15. [インストールを再開します] ウィンドウで、[OK] を選択します。

16. [インストール後の手順] ウィンドウで、指示に従って操作し、[次へ] を選択します。

情報プラットフォームサービス 4.1 SP8 のアップデートインストールが正常に完了します。

#### i 注記

- キャッシュ後のインストールでのみシステムダウンタイムが発生するため、システムダウンタイムは全体的に短縮されます。
- インストールを開始すると、インストーラによりキャッシュ中に発生したエラーが修復され、インストールが続行されます。



## 6 インストール後の作業

この節では、インストールプログラムが終了した後で、インストールが成功したことをテストするために実行する必要がある操作について説明します。

### 6.1 インストールの確認

インストールが成功したかどうかを確認するには、セントラル管理コンソール (CMC) を使用して CMS にログインします。CMC は、サーバ、ユーザとグループ、権限、セキュリティポリシーの管理に使用されます。

マシンに *Java Web アプリケーション* 機能がインストールされている場合は、**▶ スタート ▶ SAP Business Intelligence ▶ 情報プラットフォームサービス 4 ▶ 情報プラットフォームサービスセントラル管理コンソール** をクリックして、CMC を起動します。

専用の Web アプリケーションサーバをインストールしている場合は、CMC にアクセスするための Web アプリケーションサーバの URL を入力することができます。次の URL を使用します。

```
http://<<WAS_HOSTNAME>>:<<PORT>>/BOE/CMC
```

<<WAS\_HOSTNAME>> を Web アプリケーションサーバのホスト名に置き換え、<<PORT>> を Web アプリケーションサーバのリスニングポートに置き換えます。カスタム Web アプリケーションサーバのルートコンテキストまたは BOE.war Web アプリケーションコンテキストを使用している場合は、URL が異なります。

Internet Explorer を使用している場合、信頼済みサイトのリストに新しいサーバが追加されていないため、複数の Internet Explorer セキュリティ強化の構成警告が表示される可能性があります。**[追加]** をクリックして、ローカル Web サーバを信頼された Web サイトのリストに追加します。サーバが SSL 暗号を使用していない場合、**[このゾーンのサイトにはすべてのサーバの確認 (https:) を必要とする]** をオフにします。

**[ユーザ名]** フィールドに「*Administrator*」と入力し、インストールプログラムに入力した管理者パスワードを入力して、Administrator ユーザとしてログインします。

CMC の使用の詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドを参照してください。

#### 6.1.1 ログインのトラブルシューティング

CMC を使用して CMS にログインできない場合、または CMC を起動できない場合は、考えられる以下の原因を確認してください。

1. ファイアウォールが CMS ポート番号 (デフォルト 6400)、または Web アプリケーションサーバポートをブロックしていないか。  
**▶ スタート ▶ 設定 ▶ コントロール パネル ▶ Windows ファイアウォール** から Windows ファイアウォール設定を確認します。

2. URL は正しいか。

CMC にアクセスするためのデフォルトの URL は次のとおりです。

```
http://<<WAS_HOSTNAME>>:<<PORT>>/BOE/CMC
```

<<WAS\_HOSTNAME>> を Web アプリケーションサーバのホスト名に置き換え、<<PORT>> を Web アプリケーションサーバのリスニングポートに置き換えます。カスタム Web アプリケーションサーバのルートコンテキストまたは BOE.war Web アプリケーションコンテキストを使用している場合は、URL が異なります。

3. [認証] フィールドに正しい方式を指定したか。

デフォルトの認証の種類は [Enterprise] で、固有の BusinessObjects Enterprise 認証システムを表します。LDAP または Windows AD シングルサインオン認証システムを使用している場合は、システムを選択します。

4. CMC ログイン画面のユーザー名およびパスワードフィールドに正しいユーザ認証情報を入力しているか。

管理アカウントの名称は、Administrator です。パスワードは、インストールプロセス中に入力したものです。

5. Server Intelligence Agent (SIA) が実行されているかどうか。

▶ スタート ▶ SAP Business Intelligence ▶ 情報プラットフォームサービス 4 ▶ セントラル設定マネージャ ▶ の順に選択します。

SIA が実行されていない場合は、起動します。

6. CMS システムデータベースおよび監査データストアデータベースに使用するデータベースサーバが実行されていること、および CMS からデータベースへのネットワーク接続が機能していることを確認します。

7. @<クラスタ名> フォーマットを使用して、最初に CMS クラスタに接続する場合、CMC には、そのクラスタにどの CMS サーバが含まれているかはわかりません。

この場合は、CMC Web アプリケーションの WAR ファイルの WEB-INF フォルダにある web.xml で、CMS サーバリストを指定する必要があります。詳細については、web.xml の cms.clusters セクションで手順を確認してください。対応する web.xml ファイルを変更して、BI 起動パッドの CMS クラスタ情報を指定することもできます。

これらの解決策によって問題が解決しない場合は、ソフトウェアの修復あるいは再インストール、または <https://support.sap.com/home.html> でサポートに連絡することをお勧めします。

## 6.2 SAP サポート

### 6.2.1 インストール後のシステムランドスケープディレクトリ (SLD) データ サプライヤ (DS) の設定

情報プラットフォームサービスのインストール時に SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) のサポートを有効化しなかった場合は、SAP Host Agent をインストールすることで後からいつでも有効化できます。詳細については [SAP システムランドスケープディレクトリ \(SLD\) サポートを有効にする \[17 ページ\]](#) を参照してください。

SAP Host Agent をインストールしたら、設定マネージャ (CCM) を開いて、SIA ノードを再起動します。SIA が再起動または作成されると、必ず SLD 登録が自動的に実行されます。

Web アプリケーションサーバにデプロイされた Web アプリケーションの SLD サポートを有効化する方法は、SAP BusinessObjects Enterprise Web アプリケーションデプロイメントガイドの「SAP システムランドスケープディレクトリ (SLD) 登録」に関する項目を参照してください。

## 6.2.2 インストール後に SMD エージェントを設定する

インストールプロセス中に SAP Solution Manager Diagnostics (SMD) を設定しなかった場合でも、SMD エージェントのホスト名とポート番号をセントラル管理コンソール (CMC) で指定することができます。

### i 注記

情報プラットフォームサービスで SMD エージェントのホスト名とポート番号を設定するには、まず SMD エージェントがインストールされている必要があります。

1. セントラル管理コンソール (CMC) を開きます。
2. [サーバ] タブを選択します。
3. サーバー一覧で SIA [ノード] フォルダを展開し、SIA を右クリックして更新します。
4. コンテキストメニューから [プレースホルダ] を選択します。
5. Introscope に関連するプレースホルダが正しく設定されているか確認します。
  - a. プレースホルダ %SMDAgentHost% を SMD エージェントのホスト名で更新します。
  - b. プレースホルダ %SMDAgentPort% を SMD エージェントのポート番号で更新します。
6. [プレースホルダ] 画面を保存して閉じます。
7. SIA を再起動します。
8. SIA が複数ある場合は、ノードフォルダ内の各 SIA に対して手順 3 ~ 7 を繰り返します。

## 6.2.3 インストール後に CA Wily Introscope エージェントを設定する

インストールプロセス中に CA Wily Introscope を設定しなかった場合は、セントラル管理コンソール (CMC) で後から設定できます。

### i 注記

CMC で設定するには、先に Introscope エージェントをインストールして実行しておく必要があります。

1. セントラル管理コンソール (CMC) を開きます。
2. [サーバ] タブを選択します。
3. サーバー一覧で SIA [ノード] フォルダを展開し、SIA を右クリックして更新します。
4. コンテキストメニューから [プレースホルダ] を選択します。
5. Introscope に関連するプレースホルダが正しく設定されているか確認します。
  - a. プレースホルダ %IntroscopeAgentEnableInstrumentation% を false から true に変更します。
  - b. プレースホルダ %IntroscopeAgentManagerHost% を Introscope エージェントのホスト名で更新します。
  - c. プレースホルダ %IntroscopeAgentEnterpriseManagerPort% を Introscope エージェントのポート番号で更新します。
  - d. %IntroscopeAgentEnterpriseManagerTransport% を確認し、正しいネットワークトランスポート (TCP など) が選択されていることを確認します。
6. [プレースホルダ] 画面を保存して閉じます。

7. SIA を再起動します。
8. SIA が複数ある場合は、ノードフォルダ内の各 SIA に対して手順 3 ～ 7 を繰り返します。

## 6.3 サードパーティ ERP の統合

### 6.3.1 Siebel Enterprise 統合を有効化する

Siebel Enterprise 統合を有効化するには、Siebel Java Data Bean JAR ファイルを情報プラットフォームサービス Java lib フォルダにコピーする必要があります。

1. Siebel Tools をインストールしたときに作成された classes フォルダに移動します。

Java Data Bean のファイルは、通常 `<SIEBEL_HOME>%classes` フォルダに保存されています。たとえば、Siebel classes フォルダは `C:\Program Files (x86)\Siebel\7.8\classes` になります。

2. SiebelJI.jar および SiebelJI\_enu.jar Java Data Bean ファイルを、情報プラットフォームサービス Java lib ディレクトリにコピーします。

たとえば、`C:\Program Files (x86)\Siebel\7.8\classes\SiebelJI.jar` および `C:\Program Files (x86)\Siebel\7.8\classes\SiebelJI_enu.jar` を `<IPS_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\java\lib\siebel` にコピーします。

3. SiebelJI.jar および SiebelJI\_enu.jar Java Data Bean ファイルをユーザの Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリにコピーします。

たとえば、`C:\Program Files (x86)\Siebel\7.8\classes\SiebelJI.jar` および `C:\Program Files (x86)\Siebel\7.8\classes\SiebelJI_enu.jar` を `<IPS_INSTALL_DIR>%tomcat\lib` にコピーします。

4. Central Management Server および Web アプリケーションサーバを再起動します。

詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「Siebel 統合の設定」を参照してください。

### 6.3.2 JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化する

JD Edwards EnterpriseOne 統合を有効化するには、JD Edwards Java Data Bean JAR ファイルを情報プラットフォームサービス Java lib フォルダにコピーする必要があります。

1. JD Edwards EnterpriseOne をインストールしたときに作成された classes フォルダに移動します。

Java Data Bean のファイルは、通常 `<JDE_HOME>%system\classes` フォルダに保存されています。

2. 次の Java Data Bean のファイルに移動します。

- kernel.jar
- jdeutil.jar
- log4j.jar
- pseoneqryxml.jar

○ pseonexml.jar

3. 上記の .jar ファイルを、次の情報プラットフォームサービス JD Edwards lib フォルダにコピーします。

```
<<IPS_INSTALL_DIR>>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%java%lib%jdedwards%default%jdedwards
```

4. さらに、.jar ファイルを Web アプリケーションサーバの Java lib フォルダにコピーします。たとえば、情報プラットフォームサービスにバンドルされている Web アプリケーションサーバを使用している場合、デフォルトの Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリは次のようになります。

```
<<IPS_INSTALL_DIR>>%tomcat%lib
```

5. Central Management Server および Web アプリケーションサーバを再起動します。

詳細については、情報プラットフォームサービス管理者ガイドの「JD Edwards EnterpriseOne 統合の設定」を参照してください。

### 6.3.3 Oracle E-Business Suite (EBS) 統合を有効化する

情報プラットフォームサービスと、Oracle EBS 認証およびインポートロールを含む Oracle EBS との統合を有効化するには、次の手順に従います。

1. 64 ビットの Oracle クライアントを情報プラットフォームサービスホストにインストールおよび設定します。  
64 ビットの Oracle クライアントをインストールしたら、次のコンポーネントがインストールされていることを確認します。
  - Oracle JDBC ドライバ
  - JDBC-OCI ブリッジ
2. クライアントの Oracle EBS データベースにログオンし、Oracle クライアントが接続可能であることを確認します。
3. 次の Oracle クライアントバイナリを情報プラットフォームサービス Oracle ライブラリにコピーします。

コピー:

○ <<ORA\_HOME>>%bin%ocijdbc11.dll

コピー先: <<IPS\_INSTALL\_DIR>>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0%win64\_x64

4. 次のファイルを Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリにコピーします。

コピー:

○ <<ORA\_HOME>>%jdbc%lib%ojdbc5.jar

このファイルを Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリにコピーします。たとえば、情報プラットフォームサービスにバンドルされている Web アプリケーションサーバを使用している場合、デフォルトの Web アプリケーションサーバの lib ディレクトリは次のようになります。

```
<<IPS_INSTALL_DIR>>%tomcat%lib
```

5. CMS を再起動します。
6. Web アプリケーションサーバを停止します。
7. Web アプリケーションの作業フォルダをクリーンアップします。

たとえば、情報プラットフォームにバンドルされている Tomcat 6.0 Web アプリケーションサーバの Tomcat 作業フォルダ (<<IPS\_INSTALL\_DIR>>%tomcat%work%Catalina%localhost%BOE) にあるすべてのファイルを削除します。

8. Web アプリケーションサーバを再起動します。

Oracle E-Business Suite の統合をインストールしたら、Oracle EBS セキュリティコンテキストが実行されていることを確認します。これには、Integration Solution を初めて使用する前に、新しい Oracle EBS データベースで bobj\_pkg パッケージを手動で作成します。パッケージを生成するには、Oracle EBS データベースにログオンし、以下のファイルに指定された PL SQL コードを使用します。

```
<IPS_INSTALL_DIR>%SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\Samples\ebbs\bobj_pkg.txt
```

## 6.4 インストール後の診断チェック

いつでも監視ツールを実行して、診断チェックを実行したり問題を検出したりすることができます。

診断テストを実行するために監視ツールにアクセスするには、セントラル管理コンソール (CMC) にログオンして [\[モニタリング\]](#) 画面を選択し、[\[プローブ\]](#) タブをクリックします。

## 6.5 情報プラットフォームサービスの変更

### 6.5.1 情報プラットフォームサービスを変更する

これらの手順では、Windows のコントロールパネルからインストール済みのコンポーネントを追加または削除することによって、情報プラットフォームサービスのインストールを変更するプロセスについて説明します。

情報プラットフォームサービスを変更する前に、CMS システムデータベースをバックアップすることをお勧めします。

1. [▶ スタート ▶ コントロールパネル ▶ プログラムと機能](#) の順に選択します。
2. [\[情報プラットフォームサービス 4.1\]](#) を右クリックして、[\[アンインストール/変更\]](#) を選択します。
3. [\[アプリケーションのメンテナンス\]](#) ページで、[\[変更\]](#) を選択し、[\[次へ\]](#) をクリックします。
4. [\[言語パッケージの選択\]](#) ページで、インストールする言語を選択し、削除する言語を選択解除します。続行するには[\[次へ\]](#)をクリックします。
5. [\[機能の選択\]](#) ページで、インストールする機能を選択し、削除する機能を選択解除します。

機能は、以下の見出しで分類されています。

- [Web Tier](#)

Web Tier は、Web アプリケーションと Web 上のユーザ向けのサーバコンテンツをホストします。[\[Web Tier\]](#) インストールオプションを使用すると、Java Web アプリケーションが専用の Java Web アプリケーションサーバにインストールされます。

情報プラットフォームサービスと一緒に使用する Web アプリケーションサーバを準備していない場合は、Tomcat Web アプリケーションサーバをインストールおよび設定することができます。お使いの Web アプリケーションサーバベンダから入手した情報と照らし合わせて要件を評価し、ユーザの組織のニーズに最も適したサポートされている Web アプリケーションサーバを決定することをお勧めします。

サポートされている Web アプリケーションサーバをすでにインストールしている場合は、このオプションの選択を解除することにより、Tomcat をインストールして Java Web アプリケーションだけをインストールすることができます。

- プラットフォームサービス  
プラットフォームサービス機能には、ビジネスインテリジェンスプラットフォームサーバ (処理サーバ、スケジュールサーバなど)、主要なシステムコンポーネント (CMS、ファイルサーバ、バンドルされたデータベース、バージョン管理システムなど)、および情報プラットフォームサービスを組織の既存のネットワークインフラ (PeopleSoft、Siebel、SAP BW) に統合するサーバが含まれます。スタンドアロンの Central Management Server (CMS) などまたは CMS クラスタの一部として情報プラットフォームサービス BI 処理のためにインストールされたシステムを使用する場合は、サーバをインストールします。
- 管理者ツール  
管理者ツール機能を使って、管理者はインストールを維持できます。
- データアクセス  
サードパーティの企業資源計画 (ERP) システムにアクセスするためのシングルサインオンログオンのサポートが含まれます。組織で特定のシステムを使用していない場合は、それをインストールするオプションを選択解除できます。

6. 変更内容を適用するには、[次へ] をクリックします。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。

## 6.5.2 情報プラットフォームサービスを修復する

これらの手順では、Microsoft Windows のコントロールパネルから情報プラットフォームサービスのインストールを修復するプロセスについて説明します。このプロセスでは、セットアッププログラムによって初期設定されたファイルと設定が修復されます。

情報プラットフォームサービスを修復する前に、CMS システムデータベースをバックアップすることをお勧めします。

1. ▶ スタート ▶ コントロールパネル ▶ プログラムと機能 ▶ の順に選択します。
2. [情報プラットフォームサービス 4.1] を右クリックして、[アンインストール/変更] を選択します。
3. [アプリケーションのメンテナンス] ページで、[修復] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. (オプション) [既存の CMS デプロイメント情報] ページで、既存のリモート CMS の接続情報とログオン情報を入力します。

### i 注記

既存のリモート CMS に接続できない場合は、メッセージが表示されたときに [いいえ] をクリックすると修復を続行できます。

[インストールの開始] ページが表示されます。インストールを開始します。修復が完了したら、システムは元の設定に復元されます。

## 6.5.3 情報プラットフォームサービスを削除する

これらの手順は、システムから情報プラットフォームサービスを完全にアンインストールするプロセスについて説明します。

情報プラットフォームサービスを削除する前に、CMS システムデータベースをバックアップすることをお勧めします。



## 1 注記

他の製品と依存関係があるアドオン製品は、依存している製品の前に削除する必要があります。たとえば、情報プラットフォームサービスエクスプローラをインストールしたサーバの場合、情報プラットフォームサービスがないと機能しなくなるため、情報プラットフォームサービスエクスプローラを先に削除する必要があります。

以下の項目は残ります。

- CMS リポジトリ監査データベース (他のプログラムと共有している可能性があるため) バンドルされた Sybase SQL Anywhere データベースサーバを使用している場合、CMS および監査データベースファイル (.db) のバックアップは、以下の場所に残ります: <<IPS\_INSTALL\_DIR>>\sqlanywhere¥database.backup<<DATE>>¥
- ファイルリポジトリフォルダ (ユーザデータが含まれる可能性があるため)
- Web アプリケーションサーバにデプロイされた Web アプリケーションは、アンデプロイされません。WDeploy コマンドまたは Web アプリケーションサーバ管理コンソールを使用して、Web アプリケーションをアンデプロイします。
- 個々の Web アプリケーションサーバに合った Web アプリケーションファイル
- 設定ファイル

## 1 注記

これらの項目は、必要な場合、システム管理者が手動で削除できます。

1. **▶ スタート ▶ SAP Business Intelligence ▶ 情報プラットフォームサービス 4 ▶ セントラル設定マネージャ** を選択して、セントラル設定マネージャ (CCM) を起動します。
2. すべてのサーバのステータスを停止状態に変更する。
3. サーバがすべて停止したら、CCM を終了します。
4. **▶ スタート ▶ コントロールパネル ▶ プログラムと機能** の順に選択します。
5. [情報プラットフォームサービス 4.1] を右クリックして、[アンインストール/変更] を選択します。
6. [アプリケーションのメンテナンス] ページで、[削除] を選択し、[次へ] をクリックします。
7. [アンインストール確認] ページで、[次へ] をクリックしてアンインストールすることを確認します。  
アンインストールプログラムが開始し、情報プラットフォームサービスがシステムから削除されます。

## 6.5.4 情報プラットフォームサービスにバンドルされているサードパーティソリューションへのパッチの適用

情報プラットフォームサービス 4.1 インストールには、以下のような複数のサードパーティソフトウェアソリューションがバンドルされています。

- SAP Sybase SQL Anywhere
- Apache Tomcat 6.0
- SAP JVM

これらのサードパーティソリューションは現状のまま提供され、ベンダー提供のパッチまたはアップデートによるサポートはありません。これらの製品に関してセキュリティの問題が発生した場合、SAP は必要に応じて、今後の機能パック (FP)、サポートパッケージ (SP)、またはパッチによって対処します。

バンドルされたソフトウェアの新しいバージョンまたはパッチを実行する必要がある場合は、より柔軟で充実したサポートを提供するフル機能のソリューションへの乗り換えを検討してください。このリリースでサポートされるデータベース、Web アプリケ

---

ーションサーバ、およびその他のシステムの一覧は、SAP サポートポータル (<https://support.sap.com/home.html>) の SAP BusinessObjects セクションにある製品出荷マトリックス (サポートされているプラットフォーム/PAR) を参照してください。

**i 注記**

SAP JVM/JDK を別のベンダーの JVM/JDK と交換することはできません。

# 重要免責事項および法的情報

## コードサンプル

この文書に含まれるソフトウェアコード及び / 又はコードライン / 文字列 (「コード」) はすべてサンプルとしてのみ提供されるものであり、本稼動システム環境で使用することが目的ではありません。「コード」は、特定のコードの構文及び表現規則を分かりやすく説明及び視覚化することのみを目的としています。SAP は、この文書に記載される「コード」の正確性及び完全性の保証を行いません。更に、SAP は、「コード」の使用により発生したエラー又は損害が SAP の故意又は重大な過失が原因で発生させたものでない限り、そのエラー又は損害に対して一切責任を負いません。

## アクセシビリティ

この SAP 文書に含まれる情報は、公開日現在のアクセシビリティ基準に関する SAP の最新の見解を表明するものであり、ソフトウェア製品のアクセシビリティ機能の確実な提供方法に関する拘束力のあるガイドラインとして意図されるものではありません。SAP は、この文書に関する一切の責任を明確に放棄するものです。ただし、この免責事項は、SAP の意図的な違法行為または重大な過失による場合は、適用されません。さらに、この文書により SAP の直接的または間接的な契約上の義務が発生することは一切ありません。

## ジェンダーニュートラルな表現

SAP 文書では、可能な限りジェンダーニュートラルな表現を使用しています。文脈により、文書の読者は「あなた」と直接的な呼ばれ方をされたり、ジェンダーニュートラルな名詞 (例: 「販売員」又は「勤務日数」) で表現されます。ただし、男女両方を指すとき、三人称単数形の使用が避けられない又はジェンダーニュートラルな名詞が存在しない場合、SAP はその名詞又は代名詞の男性形を使用する権利を有します。これは、文書を分かりやすくするためです。

## インターネットハイパーリンク

SAP 文書にはインターネットへのハイパーリンクが含まれる場合があります。これらのハイパーリンクは、関連情報を見いだすヒントを提供することが目的です。SAP は、この関連情報の可用性や正確性又はこの情報が特定の目的に役立つことの保証は行いません。SAP は、関連情報の使用により発生した損害が、SAP の重大な過失又は意図的な違法行為が原因で発生したものでない限り、その損害に対して一切責任を負いません。すべてのリンクは、透明性を目的に分類されています (<http://help.sap.com/disclaimer> を参照)。





**go.sap.com/registration/  
contact.html**

© 2017 SAP SE or an SAP affiliate company. All rights reserved.

本書のいかなる部分も、SAP SE 又は SAP の関連会社の明示的な許可なくして、いかなる形式でも、いかなる目的にも複製又は伝送することはできません。本書に記載された情報は、予告なしに変更されることがあります。SAP SE 及びその頒布業者によって販売される一部のソフトウェア製品には、他のソフトウェアベンダーの専有ソフトウェアコンポーネントが含まれています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。

これらの文書は、いかなる種類の表明又は保証もなしで、情報提供のみを目的として、SAP SE 又はその関連会社によって提供され、SAP 又はその関連会社は、これら文書に関する誤記脱落等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP 又はその関連会社の製品及びサービスに対する唯一の保証は、当該製品及びサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

本書に記載される SAP 及びその他の SAP の製品やサービス、並びにそれらの個々のロゴは、ドイツ及びその他の国における SAP SE（又は SAP の関連会社）の商標若しくは登録商標です。本書に記載されたその他すべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。

商標に関する詳細の情報や通知については、<http://www.sap.com/corporate-en/legal/copyright/index.epx> をご覧ください。